

---

# 至空の時

白石めぐみ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

至空の時

### 【Nコード】

N9152B

### 【作者名】

白石めぐみ

### 【あらすじ】

高校に通い始めてから理が見始めた夢。それが予兆となり理と彼の義弟・威は異世界へと引きずり込まれた。二人の戸惑いとは裏腹に、物語は着実に進み始める。

## 第1話：予兆

遠く、遠くから声がする。

(・・・で、わ・・・ま・・・る・・・は・・・に)

暗い暗い闇の中で自分は一人、その声の主を捜している。

(・・・だして、わた・・・まって・・・る・・・わ・・・は・・・えに)

歩いて行くほど、その声は段々と明瞭になってゆく。

回りには黒い闇に融けるような怪しい色の水晶が自分よりも大きくそびえ立っていた。

(おも・・・だして。わたし・・・まって・・・る。わた・・・のは・・・えに)

『思い出して、私は待っている・・・』

その後ろの言葉は未だ明確には聞き取れない。

意味深な言葉に彼は考え込む。

彼女は自分に『何』を思い出して欲しくて、いつたい『誰』が待っているのか。

「君は、誰だ？」

彼は思いきつてその声の主に問いかけてみる。

答えなどは期待しない。いつも、彼女は一方的に自分へと声を掛けてくるのだから。

(わたし・・・わたしは・・・)

白い羽が舞う、黒い羽が舞う。

見えたのは暗い色の紫水晶の中に捕らわれている金色の髪を持つ天使。

(わたしは・・・い・・・あ・・・おもい、して、・・・たしはまって、る。わた・・・のはね・・・そま・・・まえに)

”思い出して、私は待っている、私の羽が染まる前に”

名前はやはり聞き取れなかった。だが、いつもよりずっと声はわ

かりやすくなった。

「君の羽が染まってしまおう前に？」

水晶の中の天使は目覚めない。だが声は先程と同じ事を繰り返している。

「羽が染まる前にどうすれば、いいんだ？」

再度、強く問いかける。

声は途切れ、どこか遠くで何かが割れる音が響いた。

(はね、が、そまる、まえに、わたしを・・・ころして)

彼は、そこで目を覚ました。

「ゆめ・・・か？」

体中にびっしょり汗をかいている。濡れたパジャマに気色悪さを憶えつつ、彼はサイドボードの上の時計を確認した。

まだ6:30・・・彼が起きるには早い時間だ。

(いったい、何を啓示しているんだ?)

何かの予兆とも思えない、だが明らかに自分に呼び掛ける夢。その理由に自分は全く覚えがない。

ただ目が覚めるといつも疲労感と罪悪感が自分を襲ってくる。

(忘れてしまった・・・?)

忘れるほど、自分はファンタジーな世界になど関わりはないと思う。

確かに普通よりも『異質な能力を持つ者』と知り合いではあるが、天使と知り合いになった覚えなど無い。

(何かが起こる前兆か?)

それならば、気をつけねばいけない。

自分が『大事だと思つる者』を一辺たりとも傷つけないように最善の努力をしなければならぬ。

彼は睡眠不足を訴える頭を振って眠気をとばすと、ベッドから降りた。

二度寝してあんな不可解な夢に疲れさせられる気など毛頭ない。

彼は適当な着替えを持つと、自分の部屋に備え付けのシャワールームに向かった。全身を覆っていた寝汗を軽く流すと、クリーニングの行き届いた下着やシャツを身につけてゆく。

「ぐつもーにん、理・理・理・理・理。何で起きてるの？」

朝に滅法強い義弟の威がノックも無しに扉を開いた。

「起きてて悪いか？」

制服のネクタイを締めながら、理は義弟に振り返る。

殆ど身支度を終えている理に威はちらりと窓の外を見た。

「いや、今日は槍かなあ・・・と」

「何が言いたい？」

低血圧な理はいつもは威が3回起こしに来るまで起きない。

もちろん、それを見越して威は早め早めに起こしに行くようにしている。

それなのに、自分が1回目起こしに来る前に自ら起きて支度をするなど、嵐の前触れとしか思えない。

理もそう思われているのは判っているので少しだけむっとした表情を作っただけで義弟の軽口を聞き流す。

「ま、とにかく準備出来てるなら下に行こうぜ。美智子さんたちを驚かせよう」

美智子とはこの家に古くから勤めるメイドの一人である。現当主の子供の頃に同年代の世話係として入ったというのだから勤続30年以上になるベテランだ。

他にも広い屋敷には執事や数多くのメイド、当主であり母でもある実の秘書たち、家族一人一人のために用意された運転手など多種多彩な人間が働いている。

そもそもこの『麻樹』という家は並の金持ちとは違い、古くは華族から始まり、戦争によりその制度が失われた後は持ち前のネットワークで経済界のトップに輝いたという家柄であった。

威はその当主・実と夫である良弘の長男である。

そして理は良弘の妹・真帆まほの死により、この家に引き取られた養子である。

理の本当の父親は今も生きているが、真帆の死で精神的に壊れかけていた理が彼と暮らすのを嫌がったために、彼はこの家に引き取られた。もちろん、父親の方は反対したのだが、新進気鋭の音楽家で海外出張の多い彼が長女である真奈と一緒に理を育てられるのが問題となり、結局、理は『麻樹家の長男』となった。

その後、理は常人よりずば抜けた頭の良さ、判断力・洞察力を実に気に入られ、かつてより余り経営に向いていないと判断されていた威に代わり麻樹家の跡取りに抜擢された。

威も自らはサポート役等が似合うと自覚しているため、母親のこの判断には大賛成だった。

斯かくして、義息が跡取りという不可思議な状況で今の麻樹は落ち着いていた。

「それにしても、理がこんなに早く起きてるとはな……ご飯、出てる分ですりるかな」

からかうように言う威に理は

「お前の分を貰うからいいよ」

と軽く返す。それに対してきゃんきゃんと威が喚く。

いつも通りの朝、いつも通りの変わらない日常がそこにある。

「威お兄ちゃま、おはよう……え？理お兄ちゃまも？」

階段の下に居た妹の由宇香がいつも通りに起きてきた威と、いつもよりも随分と早く起きてきた理を見比べた。

そしてちらりと窓の外の天気を確認する。

「ええっと、理お兄ちゃま、おはよう。今日は嵐がくるの？」

「由宇香、おはよう。威は槍が降ってくるって言ってたぞ」

「由宇香、おつはよ。やつぱりお前もそう思うよな」

それぞれ広い食卓の自分用の席に座る。それと同時に様々な料理が3人の前に置かれていく。

身体が弱く自宅ですっと療養している由宇香の前には食べやすい

お粥やフルーツポンチが、理と威の前には到底朝から食べる量とは思えないほどの様々な料理が並ぶ。

「おはようございます。理様、威様、由宇香さま」

メイド頭的美智子が食卓に現れ、深々と頭を下げた。

「おはよう。美智子さん。いつもより早いのによく料理の手配ができたね」

不思議そうに感心する威に、理は少し考えた後、彼女に挨拶がてら訊ねた。

「おはよ、美智子さん。また母さんが何も食わずに出ていった？」

美智子は穏やかな笑みでそれに返すと

「ご明察でございます。実さまは早朝に問題が発生したためすでに社されていらっしやいます。良弘さまもお食事は学会に向かう車中で取られると言われて出かけられました」

と、彼らの両親の朝の状況を説明する。

「それで、理お兄さまと威お兄さまのお腹を満たせるだけの食事が用意できたのね？」

ようやっと納得できたのか由宇香は楽しそうに結論を述べた。

妹に結論を出された理と威は互いに視線を合わせると苦笑したのだった。

## 第1話：予兆（後書き）

10年以上前にマンガで書き始めて途中でやめた話を小説にしてみました。

今度こそ完結できるようにがんばりたいです。

こちらの方が『蒼炎の目覚め』の本筋の話になります。  
理は真帆の息子。威と由宇香は良弘の子供たちです。

## 第2話：日常

優雅に料理を消費しながらの食事は終始、和やかに進む。

「今日は全部食べられたな」

朝のお粥をしっかりと食べきった由宇香の頭を理は優しく撫でてやった。

「顔色もいいし、昼間は庭で遊べるな」

「でも、今日は槍でしょ？」

おしゃまな妹のものいいに、理は苦笑しながら、隣に座る義弟を睨め付ける。

威は視線を出来る限り反らせて、義兄の怒りの表情を見ないようにした。

由宇香はくすくす笑いながら、そんな二人の様子をみていた。

(……なんだろう、これ?)

何か微かに音がした。

何の音かは判らない。透き通るような、不安にさせるような音だった。

それが兄二人の回りから、波紋を描くように響いている気がする。何か、いやな予感がした。

でもそれが何か判らなくて、由宇香はそんな自分の考えを払拭するよように、兄たちに問いかける。

「お兄ちゃまたちは、今日早く帰ってこれる？」

妹の縫すがるような眼差しに不思議そうな顔をしながら、理は自分の放課後の予定を思い出す。

「執行部が、あるかも……だから、保証はできないかな」

「最近、部活行ってなかったら、昨日、呼び出し貰ったんだよねえ」

可愛い妹の申し出だが、高校生には高校生なりのつき合いがある。だが由宇香にはそれが気に食わないのか「むっっ」と頬を膨らませた。

「じゃあ、洸野お兄ちゃまは？」

洸野・・・山下洸野は理と威の幼なじみに当たる少年だ。

フランス人と日本人のハーフである母とある旧家の跡取りとの間に生まれた少年で非嫡出子として育った。性格が穏和で由宇香のお気に入りでもあった。

彼は中学最後の年に母親を無くし、今は兄である剣人と同居を始めていた。そのせいか以前よりこの屋敷に訪れる回数は減っている。また彼以外に月路恵吏という少女を含めて、幼い時の彼らはいつも4人で行動する事が多かった。

今、彼女は親の都合で渡米し、16才という若さでありながらM ITに通っている。

妹の口からあがった友人の名前に理はいたずらっぽく笑ってみせた。

「洸野は俺と一緒にの行動になるだろ」

実際、理は洸野と行動する事が多い。

恵吏がいた頃は威は恵吏と、理は洸野といつも行動していた。一人かけたことにより威が洸野と過ごす時間も増えたが、圧倒的に理という時間の方が多い。

「お・・・」

「お？」

顔を伏せて、拳を握った由宇香は地を這うような声で文句を言った。

「お兄ちゃま達のいけずうううっ！」

妹の可愛い文句を聞き流しながら、二人は鞆を持つと、「いつてきまあす」の声と共に玄関ホールへと向かってしまった。

理と威は学校まで送るという運転手・松山の申し出を「だいぶ早い時間だから」と断り、広大な庭を抜け屋敷の外へと出た。

「まあ、たく。どこでああいう言葉を覚えてくるのかねえ」

「俺達の会話の中で、だろ？」

生まれた時から余命を宣告されている由宇香は、今まで一度も学校には通った事などない。彼女と接する子供は自分たちぐらいだろう。

常に自分よりも年上の人間とばかり居るために、彼女は普通の子供よりも幾分大人びていた。

そんな身体の弱い妹のことを理も威も・・・そして彼の友人達も大切に思っている。

「なあ、理だけでも早く帰れないか？」

いつもなら我が儘まま一つ言わない妹の言葉に、威が前を歩く義兄に問う。

「そういう事を生徒会長が聞いてくれたら、な」

理はそう言いながらも、生徒会長に今日の執行部を休むように願ひ出るつもりでいた。

子供に甘い彼女の事だ、こういう理由ならばきつと承諾してくれるだろう。

「俺も、できるだけ早く部活キリつけて帰る」

「そうしてくれ」

威の言葉に理は優しい瞳で応えると、大きく伸びをした。

いつもと同じ朝だった。その時まで・・・

## 第2話：日常（後書き）

麻樹家の日常の風景です。病気がちな妹に優しい兄たち＋その友人。兄たちはちよつとばかり心身の出来が特殊で、両親たちの職業が特殊ですが本当に普通の家庭です。

二人の通っている学校は『風原学園』の高等部です。

### 第3話：狂風

不意に、理と威の回りを包む空気が変わった。

「！！！！！！」

突如として現れた黒い風が辺り一面に吹き荒れ、二人を捕らえようと手を伸ばす。

世界がぶれるように歪み、いびつに変わる。

「理っ！！」

黒い風の中心にいた理に向かつて、威は叫びながら駆け寄る。

「逃げろっ！！威っ！！！！」

異質な風に身体を拘束されながら、理も返すように叫ぶ。

その声を封じるように、風は更に強く理の身体を締め付ける。

どこからか、声が聞こえる。今日、見た夢の音が風の向こうからする。

『運命の輪が、回り始める……』

夢の中より明確に『何か』を伝えようとする声と呼応するように、風の力は強まっていく。

『すべての輪は、闇を中心あなたにその宿命を紡いでゆく』

理を完璧に捕らえた淀んだ風は、今度は威へとその触手を伸ばす。

(引き込まれるっ！？)

思った時にはすでに、その身体は風により動きを封じられていた。

『世界は、暗黒と混沌の中、自らの行く末を決める』

ただ訥々と語られる言葉は、威の耳にも届く。

『歪んでしまった、理を正す為ことわりに……』

もがく力も奪われ、二人を包む風は異界への扉を開いた。

『すべての、世界が、動き始める……』

最後の言葉と共に、二人の身体は扉の向こうへと連れ去られた。

異質な風を非難するように、冷涼たる風が、扉のあった場所を吹き抜けた。

何かが、始まるうとしていた。

由宇香は、胸騒ぎを憶えて窓の外を見上げた。

空が泣いている。風が叫んでいる。

『何か』を奪われたと・・・悔しさを訴えかけてくる。

「理お兄ちゃま・・・威お兄ちゃま・・・」

名前を呼んでも、何の返事も返ってこない。

由宇香は胸の前で手を組むと天に向かってただひたすら祈る。

『神様、お願いです。私の声を聞いてください』

無言の聲は、叫び狂う風にかき消されそうになりながらも、天を望む。

『お兄ちゃま達を、すべての禍わざいから護まもってください』

ただ一つの願いを胸に、幼い少女はただひたすら窓の外に広がる空を見つめていた。

アメリカ・マサチューセッツ州

恵吏は自分の講義を終え、研究室へと向かっていた。

空は晴れ渡り、風は凪いでいた。

所々で声を掛けてくる自分よりも年上の下級生に挨拶をしてから、恵吏は余り人の通らない道へと入った。

「!!!!!!」

不意に強い風が吹いた。

どこか異質で、狂ったように叫んでいた。

荒れ狂う風は恵吏の襟元近くを通り過ぎると、またどこかへと消えていく。

(今は・・・)

恵吏は風の行く先を視線で追ってみるが、何も見えない。

『時が・・・来たのか』

夢の啓示は大分前から受けていた。いい知れない不安と、やるせなさや恵吏の胸に渡来した。

『動き始めた時は、誰にも止められない』

夢に出てきた『金色の髪を持つ天使』は、恵吏に嘆くように訴えていた。

そして、もう一人 『風を操る少年』も・・・

『リュウファ、聞こえているんだろう?』

恵吏は、誰もいない空間に話しかけた。

その声に答えるように涼やかな風が木々を揺らす。

『冨野と由宇香ちゃんに、力を貸してやってくれ』

遠く離れたこの地からでは、どうすることもできない。

願うのは自分の大切な幼なじみ達の無事だけなのに、『今の自分では何も出来ない。』

『神様、お願いです・・・僕らに力を与えてください』

遠い遠い空を見上げながら、恵吏は無言で願った。

『大切な人を護るには、僕らはあまりに無力です』

虚しいほど無力な自分・・・護りたくても、護る事ができない

駆けつける事すらできない本当に自分は無力だ。

『神様、お願いです。彼らを護る力を、僕らにください』

切なる願いだけを持って、風は中空へと上がり、海を渡ったのだ。つた。

### 第3話：狂風（後書き）

メインの主人公・理と弟の威がやっと異世界に行きました。

次回、地球世界側の主人公・洗野が出てこれば、マンガでかいた部分の4分の1がかけた事になります。

## 第4話：異風

学会に向かうタクシーの中で、良弘はそれに気付いた。背広の胸ポケットに入れていた携帯を取り出すと『1番』に設定されている妻の携帯に電話を掛ける。

仕事で忙しい彼女には珍しく数回のコールで電話が繋がった。

「実さん、今の、判りましたか？」

内容は詳しくは言わない。だが勘のいい彼女ならわかると思った。『感じた・・・この世界からあの子たちが奪われるのを』

電話の向こうの妻は悔しそうに、そう呻いた。

「私は発表がすんだらその足で屋敷に戻ります」

学会が終わって戻ったとしても夕方ぐらいになるだろう。

ただ逢魔おひまが時ときまでに間に合えば、まだ何か出来る可能性がある。

「長野、から？」

「本当は、今からでも戻りたいですけど・・・今、戻ったところで何が出来るわけでもないのよ」

自分が必要とされるのは夕方ほんの一瞬だけだろう。

その間、力が出せるのは自分の息子たちの親友・山下洗野だけだ。まだ能力に目覚めてもない彼に頼り切らなければいけない自分に歯がゆさを憶えながら、良弘は静かに目を閉じた。

「私はやはり夜じゃないと戻れない・・・その間、頼んでいいですか？良弘さん」

「はい・・・私のできるだけの力をあの子達の為に使いますよ」

自分たち親としての願いは子供達の無事・・・自分たちの遺伝子を持って生まれた威、妹の真帆の息子・理 彼らにとってはどちらも何者にも代え難い可愛い息子たちの無事だけだ。

「それでは、頼みます」

短い言葉で、実は電話を切った。

もしかしたら、自分から電話が来ると感じて会議を中断させてい

たのかも知れない。

良弘は車の外に流れる景色を見ながら、遠く離れた屋敷へと意識をとばしたのだった。

山下洗野は異常な胸騒ぎを憶えて目を覚ました。いつもよりも早すぎるぐらいの時間。普段なら二度寝をする所だろう。

しかしこんな状態では眠れるはずもないので、取り敢えず朝の準備を始めた。

同居している兄は朝の自主練があるためにすでに学校に行っている。軽めの朝食を済ませると兄と自分、そして理と威の分までの弁当を作り鞆の中に詰める。

身支度も早く済ませた洗野は、すぐにマンションから飛び出した。向かう先は、理と威との待ち合わせの場所。まだ時間が早いにもかかわらず、到着していない。彼は迷う事なく学校とは反対方向、麻樹家の屋敷に向かう道へと進んだ。

すれ違ったりしないように細心の注意を払いながら、彼は小走りで二人の姿を探していた。

急に、何か、空気が変わった。

「!!!!!!!!!!!!!!」

洗野が身構えると同時に黒い突風が駆け抜け、それを追うように緑金の突風が抜けてゆく。

彼は風が消えていった空を見上げながら、「何だ？今の・・・」と呟いた。

風は吹き抜けていったまま帰ってこない。その行方は自分の目には映らない。

それよりも、風が吹きぬけた瞬間、何かが世界から欠けた気がした。大事な何かが奪われた、そんな言いようもない不安が冨野の心を占める。

「ん？」

自分の足元に、先程まではなかった荷物が転がっていた。

持ち上げてみるとその学校指定のバッグには見慣れた名前が書かれていた。

『S・ASAGI』

『T・ASAGI』

その示すところに気付いて、冨野は唇を噛んだ。

朝からの不安はこれだったのだ。

何かが起こり、自分の元から大切な彼らが奪われたのだ。

「とにかく、行かなきゃ」

冨野は道路に転がっている二人分のバッグも肩に掛けると、今度は脇目も振らずに、屋敷への道を駆け抜けていった。

## 第4話：異風（後書き）

やっと、地球世界編での序章が終わりです。  
マンガでかいた部分の1/4が終わりました。  
次回からは異世界で話が進みます。

## 第5話：異界

異世界・キユスリア

かつて主なる星の『闇の王』と星の安定を図る『和なる女神』によつて作られた世界には、様々な異変が起こっていた。

『闇』土族の暴走、『土』の神官たちの急死、『光』の最高神官にはその職に合わぬ者がたち、『森』の土族は『王』たる少女のみを残して全滅した。他の『炎』・『水』・『風』にはさしたる予兆はでていないもののいつそれが現れるか不明の状態だ。

風の巫女姫・エアル＝セリシアは、風の最高神官の身でありながら、この窮状を救うための旅をしていた。

「風が・・・」

異質な、風が吹いた

自分の知っている風ではない  
ない風が何かを告げていた。

あきらかにこの世界には属さ

『主なる星との扉が開いた』  
それは若い女の声だった。

自分と同じぐらい、いや、それよりはもう少し上かも知れない。

『二つの星は重なり合う』

風と光を纏いながら、闇のヴェールに包まれた声が、天空を網の目のように覆い尽くす。

どれぐらいの翼を持つ一族・・・デュファ族の者がこの声を聞いただろう。少なくとも上位の神官位のあるものは全て、この声を聞いているはずだ。

その中で自分だけがこの声の方向を見つけた。声の強くなる場所  
そこは大きな歪みと、主なる星の音が届く場所でもあった。

ここ数日で風の発する声が一段と強くなってきた。

もつすぐ、何かが起きるのだと自分の中の『何か』が告げている。彼女は背に生えた大きな翼を広げると天高く飛び上がった。

眼下に広がる景色の中で神殿の神官達が自分に付けてくれた従者・リデルが馬を駆り走っているのが見えた。

「エアル様っ！」

ある茂みに近づいた彼が大きな声を上げて自分を呼んだ。

彼女は急降下すると従者の側に降り立った。

そこに居たのは自分と同じ年齢ぐらいの少年達だった。

服装は余り見慣れない衣装であり、何のために使うのか判らない布が首から下がっている。

この世界では余り見かけない光をも吸い込む漆黒の髪と、どこか紫色の輝きさえある黒髪を持つ少年たち。意識を失っているのかその奥にある瞳は見て取れないが、それぞれ髪の色と呼応した色をしているに違いない。

何よりも、彼らの回りに漂っている風が『彼ら』が王であることを自分に告げていた。

「彼達です。運びましょう」

エアルの言葉に、リデルは急いで予備の馬を連れに行った。

二人の顔をじっくりと見たエアルは「歯車はどう回るのでしょうか」と、誰にも聞こえないように小さな呟きを風に乗せた。

顔に差し込む強い光が不快すぎて理は目を覚ました。

見知らぬ部屋・・・どこか判らず視線だけで辺りを見回す。

(俺は・・・どうしたんだっけ)

記憶の糸を手繰り、理は自分の置かれた状況を更に探る。

そう、自分たちは黒い風に拘束されて・・・っ！！

理はその事を思い出した瞬間、ベッドから身を起こした。

自分が寝ていたのは少し広めのダブルベッドだった。横を見ると義弟は何も感じないように静かに眠っている。

「無事、か」

とりあえずは、それだけで十分だった。

見たところ、威も自分も怪我はしていないようだ。

手持ち無沙汰で威の髪の毛を撫でていると、彼はむずかりながら目を覚ました。

「ここ・・・どこ？」

光から逃げるようにうつ伏せながら、威は隣にいる理に訊く。

理はベッドから足を降ろして窓の外を確認する。窓の外にいる人景色、それらはまるで外国の片田舎にも見える。

「さあな・・・日本ではなさそうだ」

窓から覗く自分の容姿を見て、恐ろしそうな表情を浮かべる彼の行動に理は眉を顰める。

どうやら自分たちは歓迎されていないようだ。

トントン・・・

小さなノックが響いた。

威が「はい」と答えると、扉は開き一人の女性が顔を出した。

流れうつつ栗色の髪は膝まで伸び、涼やかな目元は若葉色をしている。彼女は目覚めていた彼らに笑顔を見せると、深く礼をした。

「初めてお目にかかります、我らが王よ」

「え？」

身に覚えのない呼び掛けに、二人は顔を見合わせた。

エアルはまだ頭を下げたまま、挨拶を続ける。

「私は風系神殿にて巫女姫をしております、エアル」セリシアと申します」

聞いた事のない神殿や、覚えのない『王』という呼び掛け・・・それよりも、ずっと頭を下げたままでいるエアルに理達は困惑する。「とりあえず、顔をあげてくれる？」

そのまま居られる事が嫌だった威は、お願いしてみた。

エアルは「しかし、・・・」と少し顔をあげて二人を見る。

理も威の意見に同意すると、エアルに静かに頷いて見せた。

「俺達にそうされる覚えがない以上、頭を下げたままでいられると気持ち悪いんだ」

「わかりました、閻王殿」

理の申し出に、エアルは静かに頭を上げた。

やっとまともに顔を見る事が出来た状態で、彼らは彼女に椅子を勧める。

「立ったままだと話しにくいから、座って」

「はい」

威はベッドに寝転がったまま、理はその横に腰を下ろし、エアルは部屋に唯一ある椅子に腰掛けた。

## 第5話：異界（後書き）

理と威が異世界で目覚めました。

しばらくはこの世界で話が進みます。

後、頭に出てくる『和なる女神』はリディア王国物語に出てくる『和なる女神』と同じものです。

## 第6話：天使

3人が座ったところで、威は話を切りだした。

「ところで、そのヤミオウツてのは何？」

その問いに、エアルは驚きも露わにした。

「どうやら彼女は自分たちが『王』という者だと理解していると思っ  
っているらしい。」

「『闇王』は、言葉の通り闇の王です。光王・・・光の王よ」

「理は闇で・・・俺は光なの？」

何か納得できない様子で威は呟く。しかし、エアルの困惑もそれ  
以上だった。

その中で、理は少し考え事をしていた。

夢の中の啓示・・・見つけなくてはいけない、天使。あの夢は今  
回のことときつと関係があるはずだ。

夢の中の天使が残した言葉 『翼が闇に染まる前に見つけて』  
と、という言葉通りに彼女を見つければ解決の糸口が見えるかも知れ  
ない。

彼女の希望通りに殺すのか、殺さないのかはその時になってから  
決めればいい。

「理、どうかした？」

ベッドのクッションを抱えながら威は隣に腰を下ろす義兄を見上  
げた。理は少し考えた後、エアルに向き直り問いかけた。

「エアルさん、でしたよね・・・ 天使を、知りませんか？」

義兄の発した突拍子もない質問に、威は更に頭を訝しげに眉を顰  
めた。誰よりも頭がいい理が質問するのだからそれなりの意味があ  
るのかもしれないが、どうも話が見えてこない。

「天使？」

エアルも威と同じなのかきよとんとした顔をしている。

彼女は、少し逡巡すると思いついて理に問い返した。

「すみません・・・『天使』、とはどういう物ですか？」

まさかこの質問が帰ってくるとは思わなかった二人は少し頭を抱えた。

「そうだな、説明すると・・・背に翼を持ち空を飛ぶ事が出来る人です」

地球世界にはいないその存在も、自分たちとは違う世界ならば居るのかも知れない。

駄目で元々という気持ちでした質問に、エアルはパアツと顔を明るくした。

「それでしたら、私たちデュファ族の事ですわ」

彼女はそういうと何もない背中から大きな羽を出した。白い白い、どこまでも純白の羽が少し狭い部屋を満たすように広がった。

「君は・・・天使だったのか」

眩しい者でも見たように目を細めた理に、彼女は丁寧なお辞儀で答える。

「『天使』ですか・・・主なる星<sup>せかい</sup>ではそうよばれているのですか？素敵な呼び名ですね」

彼女はその呼び方が気に入ったのか、大きな羽を少しだけはためかす。それに揺られ、彼女の栗色の髪が緩やかにたなびく。

「君達、デュファ族の中には金髪はどれくらいいる？」

続く理の質問にエアルは首を傾げた。

「デュファ族に金色の髪を持つ者は居ません。私の髪の色のように栗色や、黄土色・・・茶色が主流です。後は混血で銀色・黒・褐色などがありますが、金色の者は過去、如何<sup>いか</sup>ほどまで遡<sup>さかのぼ</sup>るうともありませんよ」

「そう、なのか・・・」

エアルの言葉に肩を落とす理を、威は不思議そうに見ていた。

理は少し考える素振りですその黒い視線をエアルの顔から外した。

パタンッ！

「エアル様っ！大変ですっ」

すさまじい勢いで扉が開くと同時に、黄金の髪の少年が現れた。服装からするとエアルとは別の種族のようだ。

「どうしたのです、リデル？」

慌てている彼にエアルは静かに問いかける。

リデルは状況が理解できていないエアルの背中を部屋の奥へと押し込んだ。

「近隣の村の者が闇王様の事を聞き及び、何か勘違いをしてこちらに乗り込んできたようです」

理は先程窓の外に見た人を思い出す。どうやらあれが村の偵察だったようだ。

「とにかく急いで馬の用意をします。逃げ・・・」

リデルの申し出を遮るように理は立ち上がると

「どうやら、俺は招かれざる客のようだな」

と呟き、リデルの入ってきたドアへと向かった。

彼は手短に逢った衝立で入り口を少し囲うとリデルに小さく耳打ちする。

「早く、見つからない内に窓から逃げる」

「しかし・・・」

言い返そうとするリデルを無視して、理は扉を開いた。

ついたての隙間からのぞき見た村人の様子にリデルは漸く時間のなさを悟り、威とエアルを連れて窓から出た。まだ村人は入り口にしか押し掛けていない。

とりあえず、戦力にはなりそうにないエアルに外へと飛び立つてもらうと、威とリデルは3頭の馬を厩うまやから出し、先程抜け出した窓の外に連れてきた。

理は窓から逃げる3人の気配を感じながら、村人との間合いを確かめていた。

柔道・空手・合気道・少林寺・剣道・・・すべての武術に通じる

自分が本気で倒せば、彼らは普通に死ぬだろう。それは流石にまずいだろう。

「何か、ご用でしょうか？」

取り敢えず用件を聞くべきだと判断した理は、村の代表者と思いき壮年の男性と向きあった。

## 第6話：天使（後書き）

書いている本人が判りにくい説明です。

つまりエアルはこの世界での『天使』の種族になりますが、その種族には金髪はいないということです。

リデルは黄金の髪をしていますが、森の一族（土族ではありません）でデュファ族ではありません。

## 第7話：逃走

村の代表の男は、見たことのない衣装を着ている理に少し怯んだ。身長は自分たちよりも高く、体格もがっちりしている。その上、彼の身のこなしは生粋の戦士であるかのように一分の隙も無かった。「あ……あなたが、闇王か？」

（また『闇王』か　）と思いながらも、理は無表情を崩さない。「俺にはその認識がないですけど、そのようですね。それで、そうだとしたらどうする？」

不遜な態度を崩さない理に男は怒りで頬を染めた。彼の怒りにつられて、回りの人間達もさっといきり立つ。

「どうするか、だと？」

儂らがどれだけ闇の士族に……あの意識無き魔物に苦渋を嘗めさせられてきたかを思い知らせるまでだっ！」

まさに掴みかからんとする相手の腕を理は無駄のない動きで払い、嘲るように笑った。

「では、俺を殺しますか？」

殺せるものなら殺してみせろという口調に男は拳を握る。後ろに控えている村人も一斉に持っていた棍棒を構えた。

「当たり前だっ！貴様のようなやつがいるから、世界は異常を来たすのだっ！……！」

繰り出される拳を理は小さな動きで避けると、向かってきた相手の足を払う。男はもんどり打って衝立に身体ごとぶつかり、大きな音を立てて転がった。

「理っ！来いっ！……！」

衝立が倒れると同時に窓の外で威が呼ぶ声がした。

「逃げる気かっ！」

「卑怯だぞっ！」

理は罵っている男の内の一人を選び、胸ぐらを軽く掴みあげる。

「武器を持たない一人の人間に対して、武器を持った多数の人間が攻撃を加えることは卑怯ではないのか？」

正論の問い掛けに言葉を詰まらせたその男を、理は背負い投げの要領で溜まっている群衆へと投げつけた。

「俺はまだ死ぬ気はないから、行かせてもらおう」

巻き込まれる形で数人が倒れるのを確認した彼は、丁寧に宣言すると窓の方へと身を翻した。

部屋での騒ぎに玄関口に隠れていた傭兵たちは姿を現すと、転がっている村人を踏み越えてこちらに向かって突進してきた。

抜き身の剣を確認した理は小さくしたうちすると、一旦、振り返る。彼は一番最初に斬りかかってきた相手にすり抜けざまに当て身を食らわし、意識を失ったその男の手から剣を奪いとった。

理はそのまま剣道の要領で向かってくる兵に鋭く峰打ちを銜え、とりあえず一人残らず混沌させてしまった。

力量の違いすぎる剣技を見せ付けられ、さらに後ろに控えていた傭兵は竦みあがった。

(今だっ！)

その一瞬の隙を見逃さず、理は外へと続く窓の縁に手を掛けた。

途端に色めきだつ兵たちを遮るために、手に持った剣を入り口脇の壁に投げつける。剣はその役目を果たすように、『ドスッ』という低い音を立てて壁に突き刺さり、追つ手の足を止めた。

「待てっ」

様々な声のする中、理は窓をから外へと出ると、馬を連れている威の傍まで全速力で走り、その馬に飛び乗る。威も自分の馬に飛び乗ると義兄の身体に傷が無いかを目で確認する。

「悪いな、待たせた」

「理、遅いぞっ」

理の悪びれない態度に無事を確認し終えた威が軽く返した。

「お二人とも、こちらです」

上空のエアルに指示で待ち伏せする人間のいない道を教えて貰っ

たりデルが馬を走らせ始める。

二人もそれに倣い、慣れた仕草で馬を繰り、村の近郊を一直線に駆け抜けた。

ヒュンツ・・・ヒュンヒュン

走り抜ける馬に向けて次々と矢が放たれた。どうやら傭兵たちは上空からでは見つけ辛い位置に弓兵を仕込んでいたらしい。

的確に狙ってくる矢に、馬が脅え足が少し遅くなる。追手たちはの逃げ足が緩まったことに、色めきたち駿馬を生かして使い追いかけてきた。

「もう少し、投げ飛ばしてくるんだった」  
放たれる矢に怯える馬をなんとかいなしながら、理は小さくぼやいた。

理の小さな呟きに、威はこの義兄の冷静ながらも売られた喧嘩は確実に買うという矛盾した部分をこの時になって思い出した。

「おい、ちゃんと手加減したんだろうな」  
すべての武道において有段者である彼が、本気で技を繰り出せば普通の人間など確実に死ぬ。

「当たり前だっ！じゃなきゃ死んじゃうぞ」  
どうやら理も自覚は有るようで、全速力で馬を走らせながら義弟の言葉に怒鳴り返す。

道にはどこまでも伏兵があり、武器を持たない彼らには不利な事この上ない状況だ。

リデルは馬で走りながら、何とか人の切れ目を抜けて目の前の森を指さした。

「あその森に逃げ込みます」

リデルの合図で、理と威は速度を上げて森の中へと走り込んだ。

「あいつら、あの森にっ」

「おい、あいつら・・・」

追手達が、口々に何かを言っていた。

弓騎士は森の入り口で馬を止めると彼らの後ろ姿に向けて矢を放つ。だがそれは様々な方向から延びている木々の枝により阻まれた。「ちっ」

小さな舌打ちの後、やっと追いついてきた村人達に彼らは状況を説明した。

「どうしますか？」

説明の後に確認してくる兵士達に、村の代表は静かに首を振る。

「この森に入る事はできん」

短い追跡劇はここでうち切られた。

取り敢えず村から厄介な闇の王が消えてくれただけでも彼ら村人たちにとり助かった。

彼らはもう一度だけ、理たちが消えた森の奥を除き、無言のままその場を去ったのだった。

## 第7話・逃走（後書き）

理は普通（？）の環境で育っているの、できるかぎり人殺しはし  
ません。

他の話の主人公達と大違いです。

## 第8話：進路

折ってから完全に逃れたところで、リデルは一度馬を止めた。

「もう、追ってきませんね」

森の入り口近くで後ろからの喧騒が消えた。余りにも唐突な事に3人とも何か不安を感じていた。

しかし今、この場所からは伏兵の気配は微塵も感じられない。

リデルは取り敢えず馬を下りると辺りを注意深く観察してみた。

理と威は馬上で同じように辺りを見渡した。

「安心、できそう？」

「できないだろうな」

自分の言葉に即座に答えた理に、威は「やっぱりね」と呟き馬上に突っ伏した。

逆にリデルはどうしてそう思うのか不思議そうだった。

「あいつらは、森に入る直前に足を止めた。まるで森に入るのを厭うように、だ」

狩人の獵場になってもおかしくない普通の森・・・それなのに、彼らは一歩たりとも入ろうとしなかった。

「考えられる可能性は、ここが神聖な場所である事が禁忌とされている場合　この場合、入ると天罰がくだるみたいの部分も考えられる。」

そしてそれとは逆に呪われた場所という場合　怪物が徘徊する場所であり、人が入るのを拒んでいるという場合だ」

息を荒くしている馬を休ませるために、取り敢えず理は馬から下りた。

威も、大きく溜息をついてから彼に倣って馬を下りる。

「緊張感は緩めないでおこう」

理の結論にリデルは少し落ち込んだ。

森の民である自分がそんな事を気づけないとは情けなかった。第

「一、自分はエアルに選ばれた案内役なのにそれすら上手く果たせてないような気がする。」

「すみません、僕が土地勘がないせいで・・・」

地図を見る上では普通の森だと思ったのだ。入り口の木々にも別に以上はないと感じた。

だからこそ、今、こうして話している間ですらここが『魔物の森』である可能性を少しだけ疑問視する自分が居た。

だがそう思っているのは自分だけで、目の前の少年たちは一向に緊張感を解こうとしない。

「別に気にする事はない。俺と威だけで逃げた方がもつと悪い結果が出たかもしれない。鬼が出るか邪が出るか・・・何事も起こってみない限り誰にも判断できない事だ」

やけに達観した理の言葉に、リデルは済まなそうに頷いた。威もそれほどその件は気にしていないのか、リデルを責める気配はなかった。

「それよりも少し上の枝が開けたところに出よう。ここじゃ、彼女が降りてこられないだろう」

理はそう言うのと食事を始めていた馬の首を叩いて、身を起こさせた。そのまま手綱を引いて、森の奥へと進もうとする。

「あああああ　　つつー!!」

歩き出した理の左腕を見て、威は森中に響きそうな声を上げた。

逃げる際にしんがり殿を務めた理は左の上腕部に放たれた矢により傷を負っていた。

まるで平然としていたので気付かなかったが、切れた3cmほどになっており白い夏の制服の腕の部分は赤く染まっていた。

「さっきの矢だな？怪我をしてるならさっさと見えよ」

傷を見たりデルは急いで自分の馬の鞍部分から綺麗な白い布を持ってきた。威はそれを器用に長く切り裂いて包帯代わりに理の腕に巻きつけていった。

「矢の先にも縫ってあったらどうするつもりだ。手当が遅けれ

ば命の危険性だつてあるんだからな」

ぶんぶん怒りながらも手際よく手当をしていく威に、理は呆れたようにつぶやく。

「まさか、普通の村人だろ？そこまでは・・・」

「逃げていく無抵抗な人間の背に向けて矢を放つただけで凶悪だつ！それを普通の村人だと括くくるな」

理の楽観的な言葉に、とうとう威が言葉を荒げた。

理は義弟がこれ以上怒らないように、「はいはい」と返すと彼の好きな笑顔で

「手当、本当にありがとう」

とお礼をいった。

滅多に見られないその笑顔に威は顔を赤く染めた。怒りの持つて行き場を失った彼は照れを隠すように自分の乗っていた馬の元へと戻ると、食事を再開していた馬の手綱を引いた。

「さ、本当に、早く移動するぞ」

理を追い抜き、さつさと森の奥へと進んでいく威の姿に理は穏やかな表情を浮かべると離れないように自分も歩き始めた。

歩き始めてから然程しない内に3人は空が見える場所に出る事ができた。

それに合わせて森の上の方で翼のはためく音が聞こえた。

「エアルさまが降りられてきたようですね」

リデルの声に二人が頷くと同時に、白い羽をもつ栗色の髪の大天使が森の木々の隙間に急降下してきた。彼女の身長よりもずっと大きな翼は見事に枝を避けきると、3人の前に静かに身体を降ろす。

「ご無事で、何よりです」

「まあ、なんとかね」

エアルの言葉に答えた理に、威は不満そうな顔をする。怪我をし

ている以上、無事とは言わないのではないだろうか。

「それにしても、すごい所に逃げ込みましたね・・・ここは地元で有名な『魔物の支配する森』ですよ」

彼女の発言に残り3人はやっぱり、と小さく返した。

「でも、この森を越えると目的地には近いです」

エアルは懐にしまった地図を地面に広げた。理と威も地図の回りにひたひたに跪く。

広げられた地図は大分古く、使い込まれていた。彼女はまず地図の一点を指さした。

「今はこちらです。そして、つい先程いた村がここ」

そこには見慣れない記号が並んでいた。もしかしたら、こちらの世界の字なのかもしれない。

二人の頭に『何故会話ができるのか』という疑問が浮かび上がったが、彼女ではそれに答えられない気がして質問するのをやめた。

「私たちが向かうのは、このメガリスの山です」

彼女は森を抜けた先にある山を指さした。

たしかに公道を使えば森を迂回せねばならず、馬を使ったとしても一週間ほどを有するだろう。

だが森を抜ければ、その目的地まではさほど遠くはないように見えた。

「危険ですが、先程の村の件もあります。とりあえず森を通り抜けることにしましょう」

エアルの言葉を受けて、リデルはあらかじめくりつけてあった荷物の中から大振りの剣を2本持ってきた。

「ここが魔物の森だというなら、武器はそれぞれで持っていた方がいいですよ。剣は使えますか？」

差し出される剣を受け取りながら、威は疲れたように息を吐いた。

「剣一本で、魔物だとかに対応できるのかな」

理は威よりもさらに大きな件を肩にかけると、ぼやいている義弟に戯けてみせる。

「威だつたら、大丈夫だろ？」

理の言葉に、威はじとーんつと少し背の高い義兄を見上げた。

「それ『理だつたら』の間違いだろ」

「いや、俺は普通の人間だし・・・」

「嘘付け・・・普通っていうのは俺のことを言うんだ」

「そうなのか？」

少し感性のずれた言い合いに、リデルとエアルは今までの緊張がほぐれたのか、顔を見合わせて笑った。

「さあ、言い合いはほどほどに、暗くなる前に先へ進みましょう」

エアルは本来の彼女の持ち味である優雅な笑みを浮かべると、まだまだ言い争いをしていそうな義兄弟と自分の従者の前を歩き始めたのだった。

## 第8話：進路（後書き）

これでマンガで書いた部分の半分が終了しました。  
キリが付かなかったので通常の2話分の長さに近いです。  
物語としてはまだ第一部ぐらいが終わった程度です。

## 第9話：脱出

森は奥へ進むほどに、入り口との様相を転じていった。

薄暗い木々の間からは常に魔獣の吐息が聞こえ、少しでも隙を見せれば襲い掛かってくる。

「たくつ！これで何度目だよつ！！」

威が喚いている横で、理は一刀両断で魔獣を切り伏せた。

「15回目、だな。これじゃあ、いつまで経っても前に進めない」

理は返す刀でもう一匹薙ぎ払う。次々と倒される仲間、獣たちも形勢の不利を悟ると、咆哮をあげて森の奥の闇の中へと帰っていく。

やっと獣を追い払った彼らは獣の血のついた剣を一払いしてから鞘に収めた。

空を見上げると陽はだいぶ傾きかけている。昼間でこれだけ活発だというのなら、闇の支配がこれ以上増す前にできる限り獣たちの居住区から抜け出しておきたい。

威は全身にあびた獣の血の臭いに辟易としながら、となりで涼しい顔をしている義兄を見つめた。

理は威とは異なり、最初に負った後ろから受けた矢傷以外これといって外傷がない。返り血も浴びていない。こういうところが人間離れているのだとつくづく感心してしまう。

「お二人ともご無事でしたか」

二人と同じく獣に襲われていたのだろう、あちこちに傷を作ったリデルがひよっこりと顔を出した。

「ああ」

「大丈夫、大丈夫」

一緒に戦っているせいかだいぶ気心の知れてきたリデルに二人は笑顔で返した。

リデルも二人に笑顔で返すと、自分とは違い怪我一つ負っていない

い二人に目を見張った。

「威さまのそれは返り血だけですよね・・・理様は返り血すら浴びてない。お二方ともすごいですね」

最初に剣を使えますかねんて、馬鹿なことを訊いたと思う。彼らは自分よりもずっと武道に優れている。理に至っては喧嘩慣れもしているので狙う場所も的確だ。

「やっぱり、こいつ人間じゃないらる・・・ひふあい」

リデルの言葉に我が意を得たりとばかりに威は義兄を指差す。

しかし、いつのまにか背後に回った理が彼の頬を両側に引くことにより言葉が崩れる。

「お兄ちゃんに向かつて暴言を吐くのはどの口かな？」

「ひふあい、ふあふある、やめれええ（痛い、理、やめてえ）」

ぐにいつと摘む義兄に威はリデルに助けを求めるが、彼は巻き込まれないようににいつこりと笑って見守るだった。

毎度の事ながら仲良くじゃれ合っていると「楽しそうですね」と上空から越えがかかった。

次いで大きな羽音ともに、逃れていたエアルが現れた。

「大丈夫だった？」

「ご無事ですか？」

わずかの時間で彼女の存在になれた威と傷を多々負いながらも元々の役目である巫女の従者という立場を貫いているリデルが同時に問い掛けた。

「大丈夫です。今回は上に枝もなかったので逃げやすかったです」

彼女は子犬のように聞いてくる二人に笑顔で答えた。

森の最深部で襲われた時は上空に枝があり逃げるのがかなわなかったが、出口が近づいてきているからか空を覆う枝は先ほどよりもまばらになっている。

「後どれぐらいで森から抜けられる？」

ただ一人落ち着き払っている理が自分たちの進む方向を確認しながら、彼女に問い掛けた。

「空から確認した感じでは、夜までには森を抜け次の村につけると  
思います」

先ほどまで彼らの行く手を遮っていた茂みは、あと少ししか存在  
せず、木々がまばらに生えた普通の森が茂みの向こうに続いている。  
どうやらこの先にある村の人間はある程度は、この森に入っ  
てきているようだ。

「森を抜ければ、森の精霊の守護領域に出ます。朝、私たちがいた  
水の精霊の守護領域とは違い闇の魔獣の被害がさほど出ておりませ  
ん。それに私が最高神官を勤める風の精霊の守護領域に近いので、  
いきなり襲われるということはないでしょう」

エアルの心強い言葉に、リデルも強く肯く。

二人の様子に少し表情を和らげた威だった横にいる義兄の顔が  
険しいままなのに気づき小首をかしげた。

エアルはその表情に少しだけ目を伏せると、わざと後にまわして  
いた忠告をしようとした。

「ただ・・・」

「俺が、『闇王』かもしれないってことはやはり知られるとまずい  
んだろう？」

「はい」

先を見越して問い返す理に、エアルは心苦しそくに肯定する。

高位の神官職に就く者なら『闇王』が『和なる女神』とともに『  
この世界』をつくりだした神だと理解している。

だが普通の者は『闇』というだけで普通は魔獣を思い出すだろう。  
その王の存在を認めないとするのは人間としての防衛本能だ。

「リデルさん。フード付の上着、ある？」

その言葉を受けて、リデルは自分の馬の荷物入れをさぐる。出て  
きたのは自分が纏うには大きすぎる上着だった。フードもきちんと  
ついている。同様にそれより少し小さめの上着も出てきたのでそれ  
ももって戻ってきた。

「これでいいですか？」

「ありがとう」

リデルから防塵用のフード付マントを受け取ると、彼は自分の服の上に着用した。かなり大きな上着を渡したつもりだったが体格のしつかりとしている理にはちょうどいいサイズだった。

威も理を倣い、リデルから受け取ったマントを羽織る。こちらのほうはフードのついていない普通の防寒用のマントだった。

「さ、陽がくれない内に森をでよう」

理の言葉をうけて、3人はそれぞれの馬に乗った。

威は器用に馬を繰りながら、小さく息を吐いた。

（山下、月路・・・どうしてる？）

きつと心配しているだろう自分の幼馴染たち。朝学校に行く時間に現れなかった自分たちを、洗野はどう感じただろう・・・きつときつと自分たちを探しているはずだ。

（由宇香・・・父さん、母さん）

思い出せば朝、あんな風に妹が問い掛けてきたのは悪い予感でもあったのだろう。

思考が不安に陥りそうになった威の肩を誰かがとんと叩いた。

振り返ると殿しんがりを務めていた理が他人にはあまり見せない優しい笑顔で威の肩をつかんでいた。

「絶対に、帰ろう・・・いや絶対に、お前だけでも元の世界に戻す」  
理はそれだけ告げるともう一度、最後尾へと戻る。

（絶対に、帰ろう）

一人で帰るのはいやだ。絶対に一人で帰らなければならない。

威は新たな決意を胸にきつちりと前を向いた。

## 第9話：脱出（後書き）

何とか更新ができました。

今使っているノートはいろいろと使い勝手が悪く3回ほど小説の内容が消えてしまい。なくなくと打ち直すという状態を繰り返してしまいました。

これで一度、地球世界にシーンが戻ります

## 第10話：震撼

### 地球世界

理と威の鞆を持って現れた洸野に麻樹家の門衛である葛西かさいは驚いた。

「どうなされました、洸野さま」

自分の屋敷の子息ではないが、それに準じる立場にある洸野に対しても葛西は誠実な態度で問いかけ、門を開ける。

「おじさんと、おばさんは？」

息を整えながら聞いてきた洸野に彼は二人がすでに仕事で出ていることを告げた。

洸野は少しだけ考え込むと、肩の荷物をしっかりと抱え上げ、門の中に駆け込んだ。

「俺は屋敷まで行きます。葛西さんは、おじさんとおばさんに屋敷に連絡をくれるように伝言してください」

常になく慌てている少年に、葛西は何かを感じ取り「わかりました」と返して門衛の詰め所へと戻っていった。

洸野は門から屋敷までの道を常にならない速度で駆け抜けると、屋敷の扉を大きく開いた。

「理！威！」

大きな声で二人を呼んだ洸野の姿に、古くから麻樹家に勤める家政婦長たる大野木美智子はいつも通り挨拶の礼をしてから、彼の顔を見た。

「どうなされました？洸野さま」

「美智子さん、理と威は、いますか？」

あがる息を抑えながら、洸野は彼女に問いかける。

異変を察知した美智子は時計を確認してから、彼に答える。

「今から10分ほど前にこちらを出ました。何か、あっ・・・」

「洸野お兄ちゃんっ」

美智子の声を遮りながら、少女の声が玄関ホールに響いた。

見上げると吹き上げの二階部分に顔面を蒼白にした由宇香が立っていた。

「由宇香ちゃんっ」

「由宇香さまっ」

体の力を搾り出すような彼女の呼び声と、あまりにも白い彼女の顔色に二人は驚きの声をあげる。

「どうしたの、洸野お兄ちゃん。お兄ちゃんたちに、何があったの？」

少女は何かを察しているのか、どんな異変が起きているのかを彼に尋ねた。彼女の手は胸元に当てられ、苦しそうに息を繰り返す。本来なら、こんな時は安静にしてベッドに入っていないかといかないけれど、今はそんなことを言っている場合ではない。兄たちの事を確かめなくては・・・彼女はふらつく足で、玄関へと続く階段までなんとか歩みを進めた。

「胸が、ずっと痛いのに」

この体調不良は、言い知れない不安から来るものだ。

「何か、あったのは・・・わかったの・・・でも・・・それ・・・が、なに・・・」

言葉をすっかり紡ぐはずが、うまく口が回らない。目の前が暗くなり、自分の喋っている声がだんだんと遠くなる。

ふらっ・・・・・・・・

彼女の努力も空しく、意識はそこで途切れた。

「危ないっ！！」

洸野はすぐにバッグを放ると階段から落ちそうになっている由宇香の体を抱きとめる。

倒れた彼女の体から力が抜けきっていた。ショックのせいかな体温

が少し下がっている。彼女の体からは冷たい汗が伝い、苦しそうに繰り返される息が、状態の悪化をしめしていた。

「美智子さん、ベッドの用意をっ」

冨野は彼女の体を抱き上げると、後ろに控えていた美智子に指示をだす。彼女は頭を下げてから急いで由宇香の部屋のベッドを整えに走った。

（由宇香ちゃん、何を知ってる？）

冨野は不安に押しつぶされそうになりながら腕の中で苦しそうな表情を浮かべる少女に無言で問いかけた。

だが、その答えが彼女からもたらされることはない。

（理・・・威・・・いったい、何があったんだ？）

いつだって一緒にいた幼馴染たちの突然の消失は、少年の心にも多大な衝撃を与えている。

だが自分まで倒れてしまったら、誰が自体を打開するのかという意地だけでたっているようなじょうたいだった。

（神様、お願いです）

冨野は胸の中で強く強く呼びかける。

いつもはいないと思っっている神にすら縋りたくなるほど心が弱っている。

（理と威を、俺の大切なものたちを取り上げないでください）

切ないほどに強い願いは、彼のまだ目覚めていない未知なる力を介し、地球世界と異世界をつなぐあらゆる扉に向けて伝えられた。

## 第10話：震撼（後書き）

やっと洸野君本格登場ですが、次はまた異世界に逆戻りです。震撼したのは洸野の願いですべての扉が震えたという意味でつけました。

ちなみに異能力の強さでは

洸野>理>恵吏>良弘（威の父）>由宇香>焰>威

の順番で強いです。

武術的な能力では

理>良弘>浩一郎>恵吏>威≡洸野

の順番です。つまり威はさほど戦闘能力が高くありません。

## 第11話：木霊

### 異世界

エアルの名前で取られた宿の一室で、理は静かに顔を上げた。急に顔を上げた理にエアルとリデルは不思議そうに彼を見つめている。

親友が自分たちを呼んでいる声がした……。そんな感じがした。しかし、その感触はあまりにも微弱すぎて、すぐに途絶えた。(山下の声が、聞こえるはずないよな)

理は自嘲をしながら、窓の外の風景を眺めた。

夕暮れに訪れた客に宿は何も問わずに部屋を3つ用意してくれた。ひとつは理と威の相部屋、後はリデル、エアルがそれぞれ使うための部屋だ。

今日、この村は偶然にもお祭りらしく、宿はそこそこ賑わっていたはずなのだが、それだけ『最高神官』の名前は強力なのかもしれない。

窓の向こうに広がる活気を帯びた宵闇の街はどこか浮かれていた。宿屋が面する表通りにはいくつもの屋台が軒を並べ独特の雰囲気が出来上がっていた。それを興味津々の視線で見つめていた義弟は……

「そつえば、威はどこに？」

よほどボウツとしていたらしい、彼が部屋を出て行ったことにすら気づかなかった。

「威さまは先ほど、市場の方に出かけられました。自分たちの世界にはないものを見つけられるのだと意気込んでらっしゃいましたよ」「あいつらしい」

そつえば威は昔から屋台みたいなものが好きだった。

安いゴムボールや粉の味がするお好み焼きなどを買ってはあっち

が旨い、こつちはだめだと評価していた。(なんとも『庶民的な御曹司』だな・・・)と引き取られた当初は感心していた。

それにしても、威の行動は普段と変わらない。その安心感に理は穏やかに微笑んだ。

初めて彼らに見せる優しい表情に他の二人は見惚れてしまうほど綺麗な笑顔。しかしその表情はすぐにいつもの無表情の仮面の下へと隠されてしまう。

「どうかした？」

一片のたりとも気を許さないその姿勢は、彼の弟にはないもの・・・そしてそんな風にしか相手に対応されないことに彼女は少し寂しく感じてしまう。

「いえ・・・あの、お聞きしてもよろしいですか？」

エアルは畏まった様子で理の前に立つと今度はしっかりと彼の容姿を観察した。

理と威の顔立ちは兄弟といえどもまったく似ていない。声の性質が似ているような気がするが、よほど関心を持って聞かないと気づかない程度だ。

闇よりもなお深い闇の色の瞳、すべての影を集めたような黒髪、顔は男性的でいて誰よりも目を引く美丈夫だ。

だからといって筋肉がムキムキと隆起しているわけでもない。存在自体が綺麗で、なによりも女性が放って置かないぐらいのフェロモンが彼からは感じられる。

一方、出かけている威の方は少し女性的な顔立ちをしている。

太陽の光を受けると紫色にも似た光を放つ髪と瞳。体格も恵まれており、長い髪の毛を後ろで無造作に縛っているのではほどのことがない限り女性とは間違えられないだろうが、髪の毛を下ろし眠っている女性に見える。

つねに見せる明るく柔らかい表情は子供らしさを残していて、理の持つフェロモンとは違う魅力を放っている。

「質問ってなに？」

自分を観察したまま固まっている彼女の様子を理は静かにじっと見ていた。

その瞳の中に何かがい出されて、不快になりそうになるがそんな感情はすべて封じてただ淡々と彼女と向き合う。

「お二人は本当に兄弟なのですか？」

エアルの爆弾発言に彼女の後ろから見守っていたリデルのほうからははらしている。

「容姿はもちろんですが、性格、考え方、すべてが違っていきます。そして何より真反対の性質の光と闇の……それも神にも匹敵する強大な力が同じ親から生まれるとは信じられません」

「同じ日に生まれてはいるんだけど、ね」

失礼な質問を投げかけてきた彼女に、彼は触れると切れそうなほど冷たく鋭い視線を向ける。

しかし彼女はその視線を真つ向から受け止めてみせた。

今度は理の方が少しだけ視線をさ迷わせ、ついには根気切れとばかりに軽く肩をすくめて見せた。

「同じ日に生まれた、従兄弟だよ。俺は5歳のときに威の家を引き取られて、それから兄弟になった」

呟きとともに彼の瞼の奥に幼いころの記憶が否応無しに蘇ってきた。

## 第11話：木霊（後書き）

地球世界の森の王である洸野の声はどうかやら時空の扉を越えて親友なつともに届いたようです。

気のせいだと思われていますが・・・

今回は『こだま』という名前は呼んでいる声が森の王だからという意味でつけました。

## 第12話：追慕

忘れてたくても忘れられない赤の記憶

目の前に立つ彼女と同じような栗色の長い髪と炎を彩る紅い瞳を持った、炎の巫女と呼ばれた女性の静かな微笑み。

『こちらへ、いらっしやい』

あの日、普段は自分を殴るのに使われる手が優しく自分を呼んでいた。

何も理解していない幼い自分は喜び勇んで彼女に抱きついて・・・抱きしめ返してくれたことに至福を感じた。

昔のように優しく髪を撫でてくれる手の温もり。

しかし、その口から発せられる言葉はどんな刃よりも冷たかった。

『あの人は、あなたのせいで出て行ってしまったの』

それが偽りの言葉だったと、だいぶ後で気づいた。

あの時、父は長く家を空けなくてはならない仕事で出かけていただけだった。

それを彼女は自分を捨てて逃げたのだと勘違いしていた。

そしてその時の自分もその事実気づかず、ただ抱きしめてくる女性に泣きながら謝った。

『ごめんなさい、お母さん。ごめんなさい』

『あなたさえ、いなければ』

刃物を持つ音が自分の後ろからした。

自分は殺されるのだと思った。

自分が殺され、死ぬことが彼女のためになるのなら、それでもいいかと小さい心は麻痺したように思っていた。

『私のように、苦しみなさい・・・理』

抱きしめる腕が強くなる。頬にあたる刃物の感触。

しかしその切っ先は自分ではなく、彼女に向かっていた。

『あなたに、幸せになる、権利なんてないわ』

彼女の行動をとめたくて声をあげようとするが、息は咽喉の奥で詰まり、まるで溺れているかのように苦しくて出すことが叶わなかった。

『不幸の中で、死になさい』

言葉と同時に目の前が紅く染まった。

鉄に似た臭いが体に染み付くように纏わりつき、動くことができない。押し掛かってくる重みはどんどん暖かさと柔らかさを失う。彼女の元から紅かった目は、更なる赤に塗りつぶされて・・・

「目の前で母親が死に、死ぬことを選択していた俺を現実に引き戻したのが威だ」

抱きしめてくれた暖かさは今でも忘れない。

だが当初は自分と同じ血を持ちながら、それも父親からより強い血を受け継ぎながらも純真なままの威を受け入れることなどできなかった。

「でも最初は『なんで死なせてくれないんだ』とも思ってた」

その反発は声に出た。

引き取られた先で一言も喋らない理に威は本気で声が失われたのだと思っていた。

伯父夫婦はどうやら自分の意志で話さないのだと判っていたようだが、無理強いなどはせず無口な自分を普通に愛してくれた。

やがて心の氷が溶け始めるとその温かさを心地よいと思えるようになった。

「今でも、威さまのことを・・・？」

理は先ほど見せた彼にしては珍しい明るい笑みを浮かべると

「まさか、かわいい弟だと思っっているさ」

と簡潔に答えた。

エアルは少しだけ視線を落とした。

自分のした馬鹿馬鹿しい質問と、彼が『身内』だと思っ者に対してだけ向けられる和やかな表情に胸の奥が小さく痛んだ。

「でも、『かわいい』なんて言ったのを知られたら、怒られるかな」

「まあ」

胸の痛みに気づかない振りをしてながら、エアルはなんとか笑ってみせる。

その顔に何かを思ったのか、理はやはり無表情のまま椅子から立ち上がると壁にかかっていた自分の上着を着込んだ。

出かける前に再度、注意を促そうとする彼女に彼はわかっていると手をあげた。

「あなたは、本当に顔立ちが似ている」

唐突に言葉を発した理にエアルはきょとんとした目で彼を見上げた。

リデルも自分の主に似ているという人物に興味があるのか二人の話に耳を傾けている。

「え……どなたに？」

「何かを見透かすような瞳をしながらも、俺の何もかも見ずに壊していった俺の母に」

瞳の色も、顔立ちも違う。重なるのはその長く流れる栗色の髪だけなのに、なぜかエアルは彼女を思い起こさせた。

理は静かに彼女の顔から視線をはずすと、「でかけてくる」と短く言い残して部屋を出た。

## 第12話：追慕（後書き）

理の母親である真帆の死に様でした。彼女の死は人によっていろんな見方の違いがあるので、今回は息子である理の部分を次回は威から見た真帆の死に様？になるかも知れません。

それにしてもエアルは生まれてから神殿以外でのせ生活が乏しい上、まだ18歳という若さのため少々世間知らずです。

自分と2歳しか変わらない女性を捕まえて「自分の母親に似ている」という理も人としてどうよとは思いますが・・・

### 第13話：追憶

「たっだいまあ」

扉がぱたんと開き、威は満面の笑みで部屋に入った。

しかし、すぐに空気が何気に重いことに気づいて居住まいを正した。

「な、なんかあったの？」

思わず問い掛けた質問にエアルは苦笑しながら「いいえ」と首を振ってみせる。

リデルも苦笑をしているところをみると原因は義兄・理であるらしい。

「理は？」

とりあえず市場で見つけた面白いものを義兄に報告しつつ3人の様子をみようと思っただが、彼の姿は部屋のどこにもなかった。

「つい先ほど、出かけられましたよ」

エアルの変わりに威とだいぶ親しくなっているリデルが答えた。

威は「入れ違いかあ」と残念がりながらも、探しに行くことはせず、買ってきたさまざまな物を机の上に無造作に置き、羽織っていた上着を壁掛けにかけてしまう。

「探しに、いかないのですか？」

「一人になりたいから出て行ったのに、俺が行ってどうするよ？」

意外そうな顔をしているエアルに、今度は彼が困ったように笑う。かなり年上に見えるが目の前の女性は世間の機微に疎いぐらい若いようだ。

エアルはそんな威の考えなど察せず、少し考えた後、意を決して問い掛ける。

「少し、話をよろしいですか？」

「？」

目を大きくあけて視線で『どうしたの？』と問い掛けてくる威の

様子を肯定と判断し、彼女は質問を続けた。

「理様のご母堂のことについて、です」

エアルの言葉に、威の表情が一瞬、冷たく変化する。

いつも明るい彼とは対照的な冷たさは、すぐに笑顔の下に隠された。

「俺は、知らない。会ったことないもの」

威はそれだけ言うとはどっしりとベッドに腰をかけた。

「しかし、お二人は従兄弟だと・・・」

「エアルさん」

窺めるように威は言葉を遮ると、彼はじっと彼女の顔を見つめた。

「理の母親は駆け落ちして家庭をつくった。そして父さんが再会したとき、彼女は死んでいた」

今でも覚えている父親の叫び声。

「真帆、あなたは何がしたかったですっ！答えなさいっ！真帆っ！！」

普段、絶対に声を荒げない父は眠ったままの叔母に向かい、霊安室の外でも聞こえるほど大きな声で怒鳴っていた。

父親の手には自殺前に書いたと思われる手紙が握られていた。

「私の狂気から、彼とあの子たちを救って・・・」

どうしてそんな手紙を書いたのかわからないまま、駆けつけたときにはすべてが終わっていた。救いの手は間に合わなかった。

「普通の両親は、まだ5歳の子供に親戚とはいえ会ったことのない人の死体を見せないよ」

次に覚えているのは泣いている従姉の真奈姉さんの姿。

理の心臓が止まったと、初めて会うはずの伯父の胸で泣き崩れていた。何が起きているか判らず、威は白い服の女性たちの足元を抜けて病室に入った。

「真帆おばさんは自殺する前に、俺の父宛てに手紙を書いてきた。そこで住所と現状がわかり、父さんたちは急いで駆けつけた。

しかし、すでにすべては終わっていた。真帆おばさんは死に、理

は生きることを放棄した」

そこで見たのは自分と同じ年齢ぐらいの少年がいろんな機械をつながれている姿。

ぴっ　　っという耳障りな音が部屋に響いていた。

顔立ちはあまり父に似ているとは思えなかった。だが彼は自分と同じ血を持つものだと感じた。

『目を、覚まして・・・僕たちと一緒に家に帰ろう・・・家族になろう』

そんな言葉を呼びかけていたと思う。

ぴっ・・・ぴっ・・・

耳障りな音が不規則ながらも違う音へと変化した。

途端に周りで心配そうに見ていた白い服の人たちが慌て初めて、自分は改めて部屋の外へと連れ出された。

「何とか理だけは死なずにすんだけど、助けることなどできなかつた」

狂気という刃で息子である理の心を傷つけたまま死んでいった・真帆おばさん。

シヨックのせいで何も見ず、何も聴かず、自分の存在を拒否した・理。

家族を失い、それでも父親についていった・真奈姉さん

威は沈痛な面持ちである当時の理の顔を思い出していた。

### 第13話：追憶（後書き）

今度は威の方から見た真帆さんの死です。

威にとり、彼女は理を傷つけた張本人ということであまりよく思っていない。

## 第14話：追想

小さい理は、今でも自分をじつと睨んでいる。

その当時はわからなかつた憎悪を今ならば理解できた。

「でも、理様を現実に戻して救つたのは威様なのでしょう？」

威はエアルの言葉に静かに静かに否定をした。

「俺は現実に連れ戻しただけ。救つたのは俺じゃない  
連れ戻すのと救うのは別だ。」

狂気しか与えられない『現実』と正気を紡ぎだせる『幻想』

どちらにいたほうが幸せなんて他人には決められない。

「夢の中で永遠の正気を得ようとしていた人を、無理矢理現実の狂気の中に引き摺り落とすことが救いになると思う？」

視線を落とした威はこれまで見せてきた明るいだけの表情とは違い、ひどく大人びて見えた。

常に自分がした事に対してジレンマを抱きつつも、それでも兄弟としてそれをおくびにも出さずに来たのだろう。

「しかし、理様は現実の狂気に惑わされてはいないと思います」

「うん、今はね。俺とは違い『救う』ことができた人間がいたから  
エアルの言葉に威は肯き、視線をそらした。」

脳裏に浮かんだのは二人の親友の姿。

一人は山下洸野・・・理に出会う前からの威の友人だ。誰よりも純粹で、無垢なくせに無限に広がる包容力を持った少年。

その暖かさで、凍えていた理の心を溶かしてしまうほどの力を持っていた。彼はたぶん今も自分たちを心配して、心を痛めているだろう。

もう一人は、月路恵吏・・・理と異質ながらも同じほど大きな闇を持つ少女。鋭敏なまでの洞察力と同じ傷を持つものとしての理解力で真実を推察し、理の心の目を覚まさせた。

なんでも知っている彼女の事だ、遠い異国の空の下にいても自分

たちの異変に気づいていることだろう。

「あいつらが植え付けられた狂気に立ち向かう術を理に教えなければ、俺は今でも恨まれたままだったと思う」

それでも仕方ないと思いたくはなかったが、もしあのまま理が成長したらそうなっていただろう。

今の義兄との穏やかな関係は、彼らが自分に与えてくれた最高の宝物だった。

「しかし、今の理様は威様をととても大切に思われていると感じますが・・・」

素直なエアルの感想に、威は艶やかな笑みで「うん、知ってる」と答える。

そこで話が終わったと判断した威は、取りあえず寝てしまおうと制服のネクタイを外し、シャツのボタンを外して、髪の毛を解いた。豊かな質量の髪は彼の背中を覆い尽くし、それだけで彼の持つ華が増した。

「それにしても、なんで今、理の母親のことを聞くの？」

一番初めにすべきだった質問を思い出し、威は寝転がりながらベッドの横までついてきた彼女に問い掛ける。

エアルは少し逡巡したあと、

「理様が仰るにはその方と私は似ていると・・・」

と告げた。威はエアルの言葉に、自分の髪をかき乱すと、悶えるように枕に懷いてみせる。

「なんで、理のやつそんなこと言ったんだろ。あんまり似てないのに」

それとも彼女と行動がにているのか？とも思うが、父の言葉から出てくる自分の知らない叔母の姿も彼女には当てはまらない。

目の前のエアルも、聞き耳をたてていたリデルも揃って『そんなんですか？』という目でこちらを見ていた。

「写真を見せて貰ったことがあるけど、似ているのはその髪だけだよ。叔母さんは、目がきつくて全体的に『炎』のイメージの強い人

だったから」

風の巫女であり、風のイメージの強いエアルと彼女の雰囲気はまったく違う。

つりあがった目元、整いすぎた顔立ち、すらりとした武道をやっているような美丈夫と、ほんわかした目元、どこか愛嬌もある顔立ち、武道などやったことのないことがありありとわかる彼女とどこが一緒だというのだろうか。

髪だけで判断するようなことはしないと信じたいが、理がどこを見て『似ている』と言ったのか問いただしてみたくなってしまう。

「あ、そういうえば、真帆おばさんも昔『神子姫』ってよばれていたっけ」

未来を見て、未来を開拓する能力を持っていた彼女が、どうしてこんな不幸を作ったのか、とその能力を持っていたと知ったときは思った。

つまりその辺りを似ていると思ったのだろうか。

「まあ、あんまり気にしなくていいんじゃない？理は神経が細かいから、ナーバスになってるんだ。今ごろ、市場で買い物をしながら反省していると思うよ」

自分が大きな傷を持っているせいか、理も彼の親友たちも他人を傷つけるのを好まない。幸せに育ちすぎている自分のほうがまだ無神経に傷つけていると思う。

「それじゃ、俺は寝るから・・・理が帰ってきたら起こしてね」

話を切るように威はそう宣言すると、僅かの時間で眠りにおちてしまった。

エアルとリデルは顔を見合わせると、小さく笑いあい、彼を起さないように部屋を出て一階の食堂に下りていった。

## 第14話：追想（後書き）

取りあえず、思い出話はここで終了です。

威の得意技は相手の心を見透かすことです。こうしてみると漫画で掻いていたときよりもエアルがかなり幼く感じます。（絵で描くと彼女は20歳ぐらいの女性）

次からはまた少しだけ地球に戻ります

## 第15話：流華

### 地球世界

「ああ、うん、そういう事だから・・・学校の方、お願いします」  
洗野は電話終えると静かに受話器を下ろした。

電話の向こうの兄・山下剣人やましたけんととその恋人であり生徒会長でもある御園裕穂みそのゆうほの二人も何か異変が起こっていることに気づいており、急な洗野からの電話にも慌てずに処理をしてくれた。

洗野の後ろでは由宇香のことを主治医に任せて戻ってきた美智子が心配そうに洗野を見ていた。

「おじさんと、おばさんには連絡はとれた？」

門のところまで門衛に頼んでおいた連絡は内線を通じて、美智子にも伝えられていた。

彼女は侍女頭としての権限を持って、当主・麻樹実と夫である良弘に連絡を入れた。

「実様は、現在香港にて商談の真っ最中です。夜までは戻れないと・・・良弘様は午前中にある仕事以外はすべてキャンセルしてこちらに戻られるそうです。あと、お二方とも、この異変に気づいてらっしゃるようでした」

洗野は美智子の言葉に洗野は「そうですか」と短く返した。

何干、何億という社員をその肩で支えている実に無茶はいえない。それに良弘だってどうしても外せないもの以外はすべて外して帰ってくるといっている。二人に文句を言うことなどできない。

しかし、力のない自分よりも、遠くの地で異変を察知するほどの能力を持った大人にいて欲しいと思ってしまう。

（こんな弱い心ではだめだ）

洗野は、自分を叱咤する。こんなにも心が弱くては、自分が何よりも大切だと思つものを奪われてしまう。

「これから、どうしますか？」

洸野の思考を奪うように、美智子が問い掛けてきた。

彼は小さく苦笑してみせる。

「今は、何もすることがないので、とりあえず理の部屋で待機しています」

洸野の言葉に、美智子はわかったとばかりに深く頭を下げ、彼を見送ってくれた。

洸野は理の部屋に続く階段を上りながら、思考を巡らせていた。自分が今、すべきことは何なのか・・・どうすれば理と威を救えるのか。

「やっと来たね、洸野」

聴きなれない声が階段の上から響いた。驚いて顔を上げる洸野の周りを新緑の葉を渡るような爽やかな風が包む。

「誰、だ？」

今の洸野にとり『風』は忌むべき象徴だ。

たとえそれに邪気がないとしても、油断はならなかった。

その心を知っているのか、声の主は3Fへと進む階段にある窓枠から階段に飛び降りた。

現れたのは10歳ぐらいの少年だった。薄い黄土色の髪が、緩やかに宙に舞い、ダンスするように敵っている。

「僕の名前は、リュウファ。理と恵吏の知人だよ」

彼はそう言うと、階段の途中で止まっている洸野へと近づいてくる。

その足音は、まるで風が渡るように滑らかで、音すら感じられない。

「洸野の協力をするためにここに来た」

いや、歩いているのではない。その姿は歩いているように見える

が、小さなは宙に浮いている。

「協力？」

「うん、恵吏の願いと由宇香の祈りが僕を呼んだ」

床に近いところで浮いていた彼はゆっくりと舞い上がると自由気ままに宙を飛ぶ。

「二人の願いは『理と威をこの世界へと取り戻したい』というものだった。そして、僕自身も彼らをこの世界に取り戻そうと思っている」

リュウファは自らの体を冴野の前に固定すると、視線を合わせるために宙に浮かんだまま彼を真剣に見つめた。

「お前、何者なんだ？」

「いい質問だよ。僕はこの世界の風を司るもの。」

僕の司る風の精霊を汚した『異界からの風』からこの世界に必要なあの二人を取り戻したいと願っている」

屋敷の中なのに巻き起こる気流が、窓際に飾られている花を強く揺らした。

「僕の言葉を信じるか、信じないかは冴野の自由だけど、あの二人を助けるための助力はして欲しい」

目の前の『風を司る少年』の言葉に違和感はない。

冴野は一度目を閉じ、心の中をきちんと整理してからしっかりと目の前にある青緑色の瞳を睨み返した。

「言葉を信じるのかは結果が出てからだ。」

今の俺にはあいつらを救う手立てすらない。何もせずに手を拱いているより、不確定でも何かの手立てがあるとしたら、俺は悪魔とだって契約を結んでやるさ」

決意を示すようにこぶしを硬く握りながら、冴野は自分の目の前にいるリュウファの間につきだした。

「ぼくは、悪魔じゃないけどね・・・まあ。いい。取りあえず理の部屋へ移動しよう」

リュウファは足を床につけると、理の部屋のあるほうを指し示し

て歩き始めた。

## 第15話：流華（後書き）

タイトルはリユウファの漢字表記です。

事態を理解しながらも手を拱いている地球世界の風登場でした。

いろいろと思慮する場所があるのか、まだ行動は起こされていないようです。

## 第16話：開始

理の部屋まで移動した二人は、主のいない部屋へと入った。リュウファはすぐに窓を開け、自らの守護する風が入るようにする。

もともと広い上に、整理整頓が上手い彼の部屋には十分なスペースがある。リュウファは冴野に手伝ってもらい幼馴染たちが来たときに使用するクッションをすべてベッドの上に移動させた。

すべての障害物が何もなくなったところで、彼は中空に向かい何かを描き始めた。

「理たちがいるのは、『キユスリア』と呼ばれる世界だ」

指先が一つ動いたたびに複雑な線が絡み合い、一つの円形の模様を作っていく。

「二人はこの世界から発せられた声ねがにより飛ばされてしまった」話しながらでも間違わないのかなと思いつながら、冴野は黙って少年の動きを監察している。

「願ったのは理と威の前世に柵しかがある少女・・・どうして彼女がこんなことをしたのかわからないけど、これは許されざることだ」

本当に彼女だけの願いかも判らない。しかし彼らを呼んだ声は前世で彼らと関係があった少女のものだった。

どの世界の闇の王よりも強大な力を持つ・理。

その理の影響を受けて強い光の力を持ってしまった・威。

どちらか一人だけでも取り返さなければ、微妙なバランスで守られていた『地球世界このせかい』に取り返しのつかない影響が出てしまう。

連れ去られた後、いろんなところに出来た綻びと歪みは世界の至る所に現れ、もはやリュウファ一人では修復できない所まで来ている。

このままでは大切なこの世界を……大切な人たちが託してくれたこの世界を守れなくなってしまう。

「二人が持つ強大な力のためについた歪をたどり、僕は突き破られた異界との扉を見つけることができる」

自分が守る地球世界の壁がそうやすやすと破られるはずはない。

正規の手順は踏んでいないが、『扉』<sup>ゲート</sup>を通つてあの風は吹き込んだはずなのだ。

強い力はそれだけで目印となる。通つたすべての道に痕跡は残してしまふ。それを探るしか今は方法がなかった。

「扉さえ判れば僕の持つ『鍵』で開くことが出来る」

リュウファは描き終えた魔法陣を確認してから、それに力を加えて広げた。

「俺は、何をすればいい？」

ただ見ているだけの今の自分が、いったい何をできるのだろうか。冨野の問いかけに、リュウファは一度だけ視線を動かすと、すぐに作業へと戻った。

「冨野がするのは、扉を開けた後の処理だ」

大きく引き伸ばした魔法陣をゆっくりと部屋の床へと下ろしながら、リュウファは説明を続けた。

「今の僕の『姿』では扉を開き、その上で安定させることまでしかできない。」

それ以上に必要な彼らを呼ぶ声・心<sup>ねがい おもい</sup>そして繋がりが必要になる。

冨野はいつでもあの二人に通じている。そして、誰よりも強い心<sup>ねがい おもい</sup>を有している……何よりも、地球世界を揺さぶるだけの声<sup>ねがい</sup>を発することができる」

呼びかけ・導き・引きずり出さなければ、いけないほど事態は悪くなっている。

力任せに連れて行かれたせいで世界だけでなく時空の歪まで出ているのだ。この時点で連れ戻せるチャンスは一度だけ、向こうが目的の場所につき、こちらが光と闇の狭間の時間『逢魔が時』を迎え

る一瞬のみだ。

「誰にでも、できることじゃない。だけど様々な力を持つ冨野にならできる」

本当は彼の能力にも理由があるのだが、それは今説明すべきことではなかった。

だが、その能力の有無を今は冨野に自覚させなければならなかった。

「自分を信じて、自覚を持って、そうすれば自ずと答は見<sup>ちから</sup>つかるはずだ」

リュウファはそっぴいながら、床に広がった魔方陣の端に自分の手を乗せた。途端に様々な種類の風が荒れ狂うように、踊るように、歌うように、求めるように部屋中に満ちる。

ゆっくりと魔方陣から豪華な扉が出てくるが、リュウファが指を横にやるだけで霧散してゆく。

いくつかの扉が現れ、消え去った後、少年は「これだ」といって扉を固定した。抵抗するように扉の隙間から洩れ出てくる風をリュウファは薙ぎ払い、その扉のノブの部分に手をかける。

カチャン・・・

軽い音と共に鍵の外れる音がした。

これで第一段階は終了だ。一仕事を終えたリュウファは冨野へと振り返ると、彼の両手を取り、彼の目を覗き込んだ

「二人を取り戻すための力は、いつだって冨野の中に存在する」

その言葉が意味するものが掴めはしないが、なさねばならないことの重要性を理解した冨野はゆっくりと彼の言葉に肯いて見せた。

## 第16話：開始（後書き）

リュウファが洗野を子ども扱いするのは彼が神代かみよの代から生きているおじいさんだからです。いろいろと真意も何も語らない人物を中心に据えると、なかなか話が進めにくくて困ります。とりあえず地球で救出のための準備が始まりました。

## 第17話：幻視

### 異世界・キュスリア

「うつうわああ　　すっげえなあ」

翌朝、太陽が上ると同時に村を出た一行は、まっすぐメガリスに向かっていた。お昼をすぎた頃に見えて始めた巨大な紫水晶の石柱に威は感嘆の声をあげている。

「あれ、全部、紫水晶なの？」

麓の森を突き抜けるように生える石柱は、それだけで見ごたえがある。威のはしゃぎっぷりにエアルは小さく微笑みながら、「そうです」と答えた。

「中央に聳えるひときわ大きな石英が聖体・メガリスの本体で、その周りに散らばる石片はその目や耳のような役割をしていると聴きおよんでおります」

森の所々には人の身長よりも大きい水晶が生えている。それが森の緑と相俟って、なかなか不思議な光景を作り出していた。

「この世界のもう一つの支柱・世界樹と対を成し、世界の安定を保っていると伝えられています」

現在、世界樹を守っているのは森の王と呼ばれる小さな少女。

まだ能力が目覚めきっていない彼女を嘲笑うかのようにメガリス周辺で異変が置き始めた。

闇の士族の暴走・『闇』がが押さえていた魔物たちの横行、世界の歪みと呼応するように聞こえ始めた風を渡ってくる『声』……。何か動き出しているのに何が起きているのか判らなくて、『主なる星』から訪れたばかりの『彼ら』に縋ってしまったことにエアルは少しだけ罪悪感を覚えていた。

「このメガリスの中には、主なる星へとつながる『扉』があると伝えられています」

その言葉は、彼らが一番欲しかった情報だった。

この世界の者でない自分たちが剣を携えて魔王を倒しに行くなんて、ロールプレイングみたいなのは御免だ。ましてやラスボスの名前が自分では洒落にもならない。

「それに、あそこには伝説があるのです」

理が出会ってすぐに尋ねた『金の天使』・・・それを聞いてすぐに彼女はその伝説を思い出した。

「金色の豊かな髪を持つ光を司る有翼人種デュファが眠っている、と」

その言葉と同時に、理の頭の中に鮮明なイメージが投影された。

黄金の髪の、自分を慕う少女。彼女は真つ白な翼を広げて死にかけている自分の傍に舞い降りる。その指先は暗闇の中で、無数に浮かぶ星の一つを指差していた。

『待っています、あなたを・・・』

夢の中と同じだが、ずつと落ち着いた声。

『私がこの世界の守護人モジビトとなりましょう。やがて来る時まで、この星を存続させるために』

彼女はそう告げると、白い羽を翻して指差した世界へと降りていった。死にゆく自分は彼女の決断に感謝をし・・・そして・・・ありえない記憶が自分を支配する。見えないはずの幻影がまるで現実かのように自分の記憶に雪崩れ込んでくる。

「理？」

急に馬の脚を止めた理に威が心配そうに声をかける。その姿に、彼女の姿が重なる。

理はぱたぱたと手を振ると、「たちくらみだ」と嘘をついた。

なぜ、今まで気づかなかったのだろう。

夢の中の天使は性別による骨格の差異や髪の色を抜けば威と瓜二つだ。紫水晶を彩った瞳などはまったく同系の物だと言っても過言ではない。

緩やかに広がる髪、自分を覗き込んでくる仕草、・・・そんな少女に対して、自分は妹に対するような思慕を持っている。

『自分』は何かを知っている……この風景も、この『星』のことも。

これが自分の前世の記憶だというのなら、自分はいったいどこからこの星を見ていたのだろうか。それすらも疑問だった。

だが先に進まなくてはいけない。

メガリスは見えているものの、森の入り口に差し掛かったところだ。どれだけ急いでも今日中にはあそこにはつけないので、森の中で野営をしなければいけないだろう。陽が沈む前に野営に適した場所まではいかなければならない。

「とにかく、先を急ぎましょう。夜の森はやはり危険ですから」

同じように野営への不安を感じている森の民のリデルは馬を巧みに操り、深い森を切り開きながらも進んでゆく。

「手伝うよ」

理と威も剣で行く手を阻むつる草や枝を払うのを手伝いはじめた。

## 第17話：幻視（後書き）

やっと金色天使の顔立ちを出すことができました。威と同じ顔です。つまりは威の母親と似ているはずなのですが、彼女とはまた雰囲気の違いがあります。

金色天使がいるといわれているメガリスが紫水晶なのは彼女の瞳と威の瞳が紫色であることに起因しています。

## 第18話：幻影

野営は地図を元に見つけた森の中の湖の傍で行うことにした。

村を出るときに買った簡易の食料とリデルが森で見つけておいた木の芽を夕飯にした。薪は自分たちが薙ぎ払ったつる草や、枯れ枝を利用する。

上空にあがったふえあるに確認してもらったところ、後半日ぐらいで到着できる距離まで近づいてきているとの判断だった。

早めの夕飯は殆ど滞りなく過ぎ、夜も深夜を過ぎていた。

「威の奴、早々に寝たな」

理の傍らを離れることなく過ごしていた威は、食べ終わって暫くすると寝息を立て始めた。

「リデルもです」

エアルの従者であるリデルは昨日からの緊張もあつてか、それとも彼が守護される森の一部にいるせいかな健やかな眠りにについている。

「威のやつはいつまで経っても子供っぽさが抜けないな」

「それが、威様のいいところですよ」

呆れるように、しかし愛情に満ちた表情で言う言葉にエアルは相槌をうつ。

理はそのまま暫く義弟の髪の毛を梳いてやる。彼女はその光景を穏やかに見続ける。小さな沈黙が辺りを満たしていた。

「エアルさん、一つ頼みがあるんだけど」

沈黙を破つたのは理の方からだった。彼は彼女の方に向き直ると、小さくこぼんと咳払いをした。

「俺たちに『様』をつけるの、やめてくれないかな」

たしかに自分たちの住む屋敷では『様』つけは当たり前前にされて

いるのだが、彼らは『麻樹家』が使用人という職務で自分たちを呼んでいるだけだ。彼女が自分たちを『様付け』で呼ぶのとはニュアンスの違いがある。

最初はその申し出に少しだけ戸惑ったエアルだったが、理からの正式な希望だと理解した。

「わかりました。私のことも『エアル』と呼び捨てにしてください」  
変わりに出た申し出に、理も少し迷った。

いくらなんでも成人した女性を呼び捨てるのは理の考えに反した。「しかし、年上の女性を呼び捨てにするのは・・・」  
「たった2歳の差です。気になされないでください」

躊躇する理にエアルは笑って見せた。その言葉に、理はぴたりと動きを止めた。それから彼女の顔をまじまじとみてから、呻いてみせる。

「18歳？」

「はい、なつたばかりです・・・って今まで何歳だと思っていらしたんですか？」

恐る恐る聴いてくる理にエアルは胡乱な目を向ける。

確認した理は、いろいろと今まで彼女の行動を振り返ってみる。

確かに大人とは言い難い行動も多々あった。しかし落ち着きのある外見のせいで25歳ぐらいと思っていた。それが成人にも満ちていないとは思ってもよらない。

「驚いたな、もう少しだけ年上だと思っていたよ。それじゃ、エアルって呼び捨てにさせて貰おう」

よく知っている高校の先輩と同じ年ならば、何となく対応がしやすい。

理は完全に身体をエアルの方に向けた。

「ところで、昼間の伝説のことを詳しく聞きたいんだけど」

理の申し出に、エアルは記憶の引出しを探った。

「金の天使の名前は『イリュージア』・・・光を紡ぐ者という名前を持つ女神の一人です」

エアルの言葉と同時に、昼間と同様の幻影が広がる。金色の天使はその腕で世界を守るように抱きながら、悟りきった表情でこちらを見ている。

「彼女は創世よりこの世界を守りつづけていると言われています」  
幻視の中の少女はエアルの言葉に付随するように口を動かす。

『この混乱の中で、幼いこの世界が残るには守護者が必要です』  
凜とした彼女の言葉は自分を呼んだ時とは違い、ずっとなんとなく強く感じられた。

「翼を持っていますが、この世界の風一族とは異なつた存在のようです」

現実と幻影の境目を探すように視線を動かす。瞳に移る紫色の水晶を見上げる天使の姿。先ほどの『前世の記憶』とは違う、世界の記憶が自分に流れこんでくる。

「まだ幼かつた『この星』を守るために彼女は水晶の中で眠っていました」

エアルの言葉を裏付けるように、『幻影の中の天使』は一番大きな水晶に触れるとその中へと吸い込まれた。

「なぜ、彼女は水晶の中で眠っているんだ？」

昼間の幻では死んでいく自分の変わりにこの世界を守るといつていた。

それなのに、なぜ眠っていた彼女が自分を呼んだのか・・・そして何より、翼が黒く染まるとはどういうことなのか。

「理由は二つある・・・と伝承されています。」

一つは、この星を作った創造主の身代わりになったというもの」  
頭の中がかき乱されるように目の前のシーンがパタパタと変わる。今度は戦場の中だった。

非戦闘員である彼女は自分を心配そうに見つめていた。自分の周りには負傷した兵士や彼女よりもずっと縁の深い相手・・・顔が見えないが、そんな人物が難しい顔で戦況を話していた。

話は誰が『あの星』を守るのかに変わり、自分はそれに手をあげ

ようとしていた。

『確かに、幼い世界には守護者は必要でしょう』

今まで黙っていた彼女が一步進み出る。他の顔が彼女を見るが、彼女はそれを気にせずにつこりと笑う。

『地球は、未だあなたを必要としています』

驚きで見下ろす自分にも彼女は笑ってみせる。それは強く儂い笑顔だった。

『この星の存在が意味を成すその時まで私がこの世界を守ります』  
白い羽が空間を覆うように広がる。その羽が持つ障壁の力は誰も  
が知っていた。

「・・・そしてもう一つは彼の帰りを待つために、だというもので  
す」

『だから、その時が来たらあなたが私を起こしてください』

エアルの最後の言葉と重なるように金色の天使の言葉が発せられる。

その声はどこまでも明るく、自分の悲しみなど見せないほど美しい声だった。

## 第18話：幻影（後書き）

理が現実で見ている部分と、前世として感じている部分が入り混じってしまいか訳の判らない文章になってしまいました。  
下手に説明を入れるとなんか自分から土つぼにはまりそうなのでこれであとがきを終了します。

## 第19話：確率

幻影は、そこで終わった。

目の前にはこちらを見ているエアルの顔がある。

そして横にはまだぐっすりと寝ている義弟の姿。

「彼女は、辛くはないんだらうか？」

理はぼつりと呟いた。エアルは少し考えた後、静かにかぶりを振った。

「辛くはないと思います。その人を信じているならば・・・信じて、待っている間は来てくれるという可能性はずっと消えないのですから」

時を定めた約束でないのなら、来ることを信じている間はずっと約束は破られていないこととなる。

そう、たとえそれが永劫の時を結ぼうとも・・・

「永遠に不確定な確率が・・・」

理は嘲るように口元に笑みを浮かべる。そんな長い時間を待ちつづけることにどれだけの意味があるのだらう。

「しかし、ゼロにもマイナスにもなりません」

エアルは達観したように言葉を返す。究極の考えだと理は思った。待ちつづけるなんて自分にはできない。

そんな無駄な希望は母が正気に戻るのではと思っていたあの幼い日に捨ててしまった。

助けはこない、迎えはこない、自分が求め、行動し、手に入れない限りはすべては虚無のように消えるのだ。

だからこそ、こんな世界に落ちた後も自分は行動しつづけた。元の世界に戻る道すらも自分自身で見つけるために。

「あなたは、待つことを恐れているみたいですね」

エアルが理の考えを読んだみたいに呟いた。

彼女が読心力を持っていないことは知っている。しかし、こんな風に言いあてられると少しばかり疑いたくなってしまう。

「でも、少しは信じてみてはいかがですか？待つことによって生まれるゼロでもマイナスでもない確率を・・・そうすることで見えてくる真実だつてあると思います」

もしかしたら目の前の女性も何かを秘めているのかもしれない。理は少しだけそう思った。

ガサリ・・・

暗闇の中で遠くの茂みが動いた。

その音に反応するように理は近場にあつた剣を手を取った。ただならぬ気配が森の奥から静かに忍び寄ってくる。

ぐっすり寝ていたはずの威はいつのまにか目を覚まし、異変を察知せずに寝ているリデルを起こしている。

「エアル、夜間飛行はできますか？」

理の問いかけにエアルは肯くと、相手を刺激しないように、だが急いで羽を広げた。

獲物が逃げることを気配で察知したのか、忍び寄ってくる『モノ』は近づくスピードを上げた。

「空へっ」

「はいっ」

理の命令と同時にエアルはその身を宙に躍らせた。広がる翼は僅かにある上昇気流を捕らえ、天高く舞い上がる。

があああああつ

ぐるるるるるるるる

がうあああつ

現れた獣は見事な牙を持った獣だった。

突き出した牙は刃のように硬く、鋭いつめは辺りの木々を切り裂く。体躯を包む毛皮は毛足が長く、黒光りする獣毛はウエーブを持って体を覆っていた。身体づくりは豹に似ているが、隊列を組んでいるところは狼のようだ。

すでに獲物を捕食するための体制ができているのか、彼らは湖岸に向けて半円を小さくするように近づいてくる。

がおうつー！！

声と共に先発と思しき若き数匹の獣と年老いた獣一匹が襲い掛かってきた。

理はすかさず指揮権を持っていると思われる若い狼を見出し、その腹に剣を叩き入れた。威も理のフォローのために年老いた狼を叩ききる。指揮系統を奪われた先見隊は保々の体で群れの方へと戻っていく。

理は威と共に炎のついたままの薪を焚火の中から取り出し、大きな気配を出している3方向に向かい投げつけた。

ぎゃうんっぎゃんぎゃん！！

そこそこいい場所に命中したのか、半円の包囲網が乱れ始めている。その証拠に一気に襲い掛かってくると思われた獣たちは個々に理達に向かい襲い掛かり始めた。

ガギインッ

獣の牙と触れ合う刀がいやな音を立てた。

その瞬間、理の使っていた刀が根元に近い部分で折れてしまった。折れ方を見ると、どうやら最初から何らかのひびが入っていてこの

所の連戦で寿命がきてしまったようだった。

理は盛大な舌打ちを鳴らしながら、予備の刀を求めて単身、馬の方に駆け寄る。

そこでは先程投げつけた薪により小さなボヤが起きていて、馬はその炎に脅えてパニック状態になっているようだった。理は暴れる馬の脚を避けながら、リデルの荷物の中から予備の剣を見つけ、急いで手にとると鞘から抜き放った。

「理（様）っ！危ないっ！！」

二人の叫び声と共に理が見たのは炎を飛び越えて襲い掛かってくる獣の姿だった。

## 第19話：確率（後書き）

理vsエアルの確率論でした。どちらが前向きとも後ろ向きとも言い難いと思います。

きっと理のおみくじにはいつも「待ち人：来ず」とでも書かれているのかもしれませんが。

## 第20話：重複

### 地球世界

リュウファの準備を待っていた洸野は余りの衝撃に顔を上げた。

（理っ！？）

何が起きたのか分らなかった。ただ自分の胸が引き裂かれるような痛みが続いている。

この不安をリュウファに伝えようと少年の方に視線をやると、彼は難しい顔をしながら、扉に手をつけていた。

「やっぱり、ずれが生じてる」

キュスリアと地球は元々同じ流れのはずなのに、時間がずれていく。

二人が浚われた時に時の流れとして一日前のキュスリアについて事で生じていた疑問はここに証明された。

「もうすぐ時間が重なる。その時に連絡をとらなきゃ」

リュウファはそういうと扉から手を離し、洸野へと振り向いた。

そこで見た彼の顔色にギョツとする。

「どとどど……どーしたの？」

「何か、悪い予感がする……分らないけど、自分の奥の能力がちからあふれる」

見ると洸野の周りを囲む緑色のオーラはこれ以上ないほど深みを増していた。

「ええええ……どうしよ。ええええっ」

さすがに慌てた彼はとりあえず、向こうへと通じる円陣の中へと彼を入れた。

本当はベッドか何かで休ませてやりたいのだが、もうすぐ時が重なり、ほんの短い間だけ、向こうとの交信が可能になる。その時にどうしても彼が必要だった。

能力が溢れそうになっっているのなら、それを逆に使わせてもらって向こうとの扉を開ける力に変換えて発散させるのも一つの手だろう。

(あ………っ)

洸野の前に見たことのない森の幻影が見え始めた。

暗い暗い森……獣の咆哮、飛び立つ白い羽。

「ごめんなさい、辛いだろうけど少し使わせて貰うね」

彼はそういうと緑色の光を放つ彼を扉の前に立たせる。

見慣れているはずの理の部屋、不可思議な豪華な扉、場違いな幻影……森はどんと自分に近づいてくる。

(誰が、襲われている?)

「っうあっ」

叫び声をあげたのは金色の見知らぬ少年。

そして……その傍で剣で獣を追い払おうとしている威の姿……視線を巡らす。

もう一人は……

ガギインツ

剣の折れる音がした。

見ると自分が捜し求める相手の刃が折れていた。彼は短くなって使い物にならなくなった剣を一匹に投げつけると予備の刀を求めて単身で馬の方へと走る。

(理っ……!)

炎の向こうから獣の声が聞こえる。

『カミコロセ』

『ホノオ・ヲ・コエヨウ』

唸り声(うなり)が自分の耳には言葉として雪崩れ込んでくる。

『オレ・ガ・イク』

『ヒト・ゴトキ・ナゼ・ハムカウ』

理解<sup>わか</sup>らないが、理の身に危険が迫っているのは確かだった。理は炎を越える獣に驚き目を見開く。

『だめだっ!!!』

聞こえるはずのない声を出して、洸野は理と獣の間に踊りこんだ。突如現れた緑色の光に獣がひるむ。

『ナゼ・モリ・ガ・ココニ』

同じ言葉が獣たちの口から次々と出て、やがてリーダー格の獣の鳴き声と共に彼らは森へと帰っていった。

「山下？」

自分を呼ぶ声に洸野が振り返ると驚いたように理が自分を見ていた。

やはり驚くよな・・・と思っていると彼の手が自分の頬に触れようと伸ばされた。しかしそれは虚しく空を切った。

『力だけをこつちに送っているって、説明された』

山下の言葉に、理は「リュウファがいるのか？」と尋ねてくる。

どうやら少年が『理の知り合い』だというのは本当らしい。

「えええっ山下？透けてるってことは幽霊か？生霊？」

威も理の傍にいる洸野の姿に驚いている。

「森の・・・王？主なる星<sup>せかい</sup>の森の王?!」

金色の青年はやけに興奮したように自分をさして何か言っていた。その後ろにいる柔らかい感じの天使も驚いたようにしている。

『時間がない・・・伝言だけ伝える』

洸野は後ろから自分に指示を出すリュウファの言葉どおりに口を動かし始めた。

## 第20話：重複（後書き）

冒頭の部分でやっと漫画でかいた部分が終わりました。

以下はリディア王国物語と同じように展開を思い出しながら普通に打ち込めます。

案外、そのほうが早く話が書けることに気づきました。

重複は時空内での存在が重複しているということと、世界と世界の時が重なるという意味でつけました。

## 第21話：約束

突然現れた親友の姿に驚きながらも、理は冷静に状況を判断していた。

自分たちと同じようにかどわかされた訳ではないようだ。後ろに小さいリュウファがいるせいでか、やたらと足元を気にしている。

『時空のずれのせいでそちらからこちらに戻るチャンスは明日のお昼過ぎ・・・それまでに扉の前に辿りついておいて欲しい』

洸野の説明から理は自分が向かっている先が間違っていないことを知り安心した。

自分だけならともかく、威もいる状況では僅かの判断ミスも許されない。威を地球世界に返す。そして自分も・・・それだけを求めているのだから。

『こちらの『風』が扉を開くと必然的にそちらの扉も開くことが出来るようになるらしい。その後は俺がお前らを引っ張り出す』

大根でも引き抜くように軽く言うてくれているが、それが難しい作業であることは彼自身がわかっているのだろう。瞳が真剣なままだ。

『絶対に、帰ってこいよ・・・約束だぞ・・・』

声にノイズが入り始めた。時空がまたずれ始めているのだ。

『ああ、どれだけの時を経ようとも、必ず帰る』

『待つてるよっ、山下っ』

たとえこのチャンスが駄目になったとしても次を求めて行動を起こす。待つことなんてしない。

しっかりと親指を突き出した二人に洸野は花も綻ぶような穏やかな笑みで返した。

『ああ・・・やく・・・く』

声はノイズに消され、緑色の光が森へと霧散していった。とたんに森の一角が別世界の様に優しい空気へと変化した。

「すごい……すごいですね。さすが『主なる星』の『森の王』です。異なる世界に対しても影響力を持つなんて」

やや興奮したように顔を赤らめながらリデルが理と威の元へと駆けつける。

エアルも始めて目の当たりに見る凄まじいほどの力に少し興奮しているようだ。

普通、『闇』や『光』……その他の『エレメント』を持つ王ならば他の世界で力を振るうことが出来るが、『森』と『大地』は世界に縛られることが多い。

それゆれその『星』で最高の位置でいても、他の世界では無力になる。

しかし先程の『少年』は違った。他の世界でも通用する能力を持つ彼は、自ら発していた光により森の臭気と邪気を見事に払い除け、森に静寂を取り戻した。

「『森の王?』」

また『王』なのかとも言いたげに二人は顔を見合わせた。

「あれほどの緑のオーラ、王以外ではありえないでしょう」

確かに、親友の身体は光っているようだった。

リュウファの能力を借りつつ、精神体のみこちらにシンクロさせたようだった。あまりにも普通に喋っていて気づかなかったがそれはとてもすごいことなのではないだろうか。

「とにかく、あの方のお陰で安心できるスペースができてあげりました。朝までゆっくり眠れますよ」

清浄な森の気の中には、魔で汚された獣は入れない。

普通の獣もその中で不浄を犯さない。

たったあれだけの来訪だけでこれだけの場を作り上げた見事さに、リデルの尊敬の念は高まる。

「とりあえず、寝るか……」

「おう」

たとえ自分の友人がどのような人物であろうとも彼は彼だ。

そして彼は自分たちが安心して眠れるようにこの場を作ったに違いない。この澄んだ大気は彼の匂いがするようだ。それだけのことにはやけに安心して眠っている自分たちに苦笑しながら、理と威は眠りについた。

## 地球世界

緑の光が止むと同時に洸野はその場でくず折れた。

爆発しそうだった能力はすでになりを潜め、身体に少しのけだるさが残っている。

「伝言を伝えるだけにしてって言ったのに」

リュウファは洸野の背中を支えながら文句をいった。

まだ能力に目覚めきっていない洸野が、清浄の場を作るのは負担が大きい。

使ったのは純粹に森の能力だけだから30分もすれば体力も回復するだろうけど、それでも無茶は無茶である。

「ごめん、でも、あいつらがすっかり眠った方がいいかと思って・

」  
威は兎も角、睡眠不足の時の理は『少し』やることが荒っぽくなる。

そういうことを考えると彼にも安心して眠る場所を作ったほうがいいかと思った。

「とにかく、次に道が開くのは逢魔が時・・・後6時間ほどあるから眠って体力を回復してね」

リュウファはそういつて洸野の身体を持ち上げようとしたが、体格差がありすぎてびくともしない。

「自分で移動できるよ」

洸野はふらつく足を支えて立ち上がるうとした。しかし足元がせ

んぜんおぼつかない。

リュウファはため息をつくど、濃縮した風を呼び寄せ、彼の身体を浮かしベッドに運んだ。

「悪い」

「そう思うなら、次からは無理をしないでよ」

冴野はリュウファの忠告に「はい」と答えると瞼を閉じた。

## 第21話：約束（後書き）

森の王・洸野、本領発揮でした。

精神不安定の理にとり洸野の作り出す森のマイナスイオンは効き目のいい常備薬です。

## 第22話：疑惑

翌朝は村で眠ったときよりもすっきりと起きることが出来た。

リデルは久しぶりに清浄な森の気を得たおかげでいつもよりも元気がだ。しきりに洸野の能力のことを「すごいですよ」と誉めている。

洸野の置き土産は森の他の場所でも影響が出ているらしく、空の探索を終えたエアルも彼のことを絶賛していた。

「メガリスまでの道が清浄な気で包まれています。昨日のままなら、今日中につけるか怪しいものでしたけど今ならば午前中にも辿り着けそうです」

エアルの言葉に理の眉根が少し寄る。

いったいどれだけの無茶をしたのか、心配になる。彼のことだ、自分のことなど余り考えずに能力を使ったに違いない。

自分たちを戻すために心配に無理をさせている現状をどうにか打破しなければならぬ。

そのためにもあの紫水晶メガリスの元にいち早く近づくことが自分たちの使命だった。

「馬は1頭はもう駄目ですね・・・残り2頭で行きましょう」

リデルはつないであった馬を確かめながらそう告げる。残りの道への時間を考え、余分な荷物をここに置いていき、人が2人乗れるようにする。

簡易の朝食を済ませると彼らは置いていく荷物を一つにまとめて丈夫な布をかけ、リデルと威、エアルと理という形で分乗し、すぐに森の奥へと馬を走らせ始めた。

近づくに連れメガリスの大きさがはつきりと判るようになった。

色ガラスにも見える大きな塊がごろごろと大地に転がり、少し暗

い色を含んだ水晶がこちらを監視しているようだった。

「前に来たときはこんな感じではなかったのに……」

エアルは『巫女姫』に就任した直後、参拝した時のことを思い出す。

メガリスは今と同じように大きかったが、その輝きは段違いに強かった。こんな暗い色の石など一つも転がってなかったような気がする。

異変の最初は新しく就任した『光の神官』がこの地を訪れた時からだろう。

度重なる異変・魔物の暴走。人を寄せ付けなくなった『聖体』メガリス。

光の神官は何もしていないといっていたが果たして本当なのだろうか。

第一、これほど強く響いている風の中の『ねがこ声』を聞き取れないあの男が光の神殿の最高神官であること事態が間違いの始まりではないかとエアルは真剣に思っていた。

他のエレメントの神官たちが『彼の弟』の方がその座に相応しいと思っけていても、神殿内の最重要事項に口出しできるはずもなく、エアルは始終歯がゆさを感じていた。

『排除セヨ……』

その言葉はどこからともなく響いてきた。

紫色の結晶の中に生まれた黒い渦が、澱みながらも力をためる。

『コレ以上、奪ワレル事ハ許サレヌ……排除ヲ』

馬が異変に気づき、暴れ始める。

理はなんとか馬を宥めるとエアルに降りるように言った。彼女が急いで降りると同時に理もその背から降り立ち、馬を開放してやる。

こんな突き刺さるような憎悪の念の中で馬に正常でいるということと自体が無理だ。

見るとリデルたちも同様に馬を下りていた。

「この先は徒歩だな」

馬はきつとあの清浄な気で埋められた場所に戻っているだろう

そう信じて4人は更にメガリスへと近づく。

『排除・・・排除・・・』

悪意の言葉は先ほどから引つ切り無しに続いている。

いったい何が起きているのか解からないが、『彼女』<sup>「えのめし」</sup>は大切な『

何か』を奪われたために狂ったようだ。

「やはり、光の神官が何かをやったのですね」

「それ、どうということ？」

初めて聞く内容に、理はエアルに視線を向けた。彼女は下を向くようにしながら、悔しそうに唇を噛んでいる。

「最高神官の職につくものは、必ず、メガリスと世界樹に挨拶に行くのが慣例です。もちろん私も一度ここへと来たことがあります。

そして2ヶ月前、ある男が光の最高神官となりこの地を訪れました。それからこの異変が起こったのです」

その言葉に理の目がすうっと細められる。

「この水晶の核となっている金色の天使をその彼が盗った？」

「可能性がないとはいえません」

金色の天使はこの世界を守り、水晶は魔の気に染まらぬように金色の天使を守っていたはずだ。

それを無視して水晶の中の天使を浚<sup>さら</sup>ったとすれば・・・この世界は守護の一つを剥がされたことになる。

『私の羽が、染まる前に、私を殺して』

夢の中の天使はそう言っていた。たった二ヶ月で彼女の羽がどれだけ魔の気に染まったのだろうか。

少なくとも夢の中の彼女の羽はまだ白かったのが唯一の救いだ。

「光の王と闇の王は、メガリスの中の天使と深い関わりを持つ・・・ゆえにあの水晶の意識と接触できるのもあなたがただだけだと言われています」

エアルはやつと彼らをここまで連れてきた理由を告げる。それが彼女のすべき事柄だった。

## 第22話：疑惑（後書き）

エアルがやっと自分の行動理由を彼らにつげました。

彼女はずっと自分の世界を救うことだけを前提に動いてきました。

それが紫水晶メガリスの暴走を止めることです。理と威がいやがったとして

も地球世界との扉がそこにあるかぎり、彼らはやってくれないと思っ  
て彼女はこれまで旅をともしてきました。

ちなみにリデルは本当に何もしらずに付き添っています。

## 第23話：問掛

どこか秘密にしていた彼女がやっと話してくれた真実に、少しだけ理の目元が柔らかくなった。

威も然程怒っているようには見えない。逆にエアルの従者であるリデルの方が驚いているようにも見える。

彼女は彼らの表情を見て驚いていた。

「別に怒るほどの内容じゃない」

「隠し事をしながら一緒に行動されるのが気持ち悪かっただけだし、もし『地球世界』がそんな状態になっていて、更にそれを回避できる人間が異世界から降って来たなら、自分達だってその人を利用するだろう。」

それぐらいの事で怒ったりなんかはしない。

ただ短い間とはいえ、一緒に行動しているのにすべて隠されていたことが気持ち悪かったのだ。

彼女は「そういうものなのか？」と視線で問いかけながら首を傾けた。その表情は年相応の高校生ぐらいの少女に見えた。

「さ、秘密もなくなったところで先に進もう」

理はこれ以上会話を続ける気などないかのごとく、メガリスまでの道を黙々と歩き始める。

『排除、セヨ・・・排除・・・スル』

水晶から響いてきた声が、ある明確な意思を持って変わる。

異変を察知した理は威を、エアルはリデルと共にその場から跳躍する。

ざあああああああああああつ

耳障りな音と共に彼らが元いた場所の草が一直線に焼けた。

度重なる警告を無視して近づく者に紫水晶メガリスの防衛本能が『自らに

害為す侵入者』だと認識して牙を向いたのだ。

「レーザー光線みたいなものかな、水晶の屈折を使って太陽光を焼くための力に替えているってところだな」

やけに冷静に状況把握をする義兄に、威は胡乱な目を向けながら状況をどう打開すべきかとエアルに視線を向けた。

「水晶の暴走を止めるためには光の王か闇の王が直接本体に手を触れて呼びかければいいそうです・・・しかし・・・」

少しでも物陰から出ようものなら先ほど放たれた熱き光によって攻撃される。できるだけ物陰だけを選んでいったとしても残り僅かの場所はやはり無防備になる。

「とりあえず、俺と威はあの巨大水晶メガリスの傍まで行く。エアルとリデルはここで待機していてくれ」

理が振り返ると、威も解かっているかのように一番近くまで行けるルートを辿り始めた。

レーザーを発射するのは巨大な水晶のみのもので、自分たちの周りにある水晶たちは言葉を発しても攻撃は仕掛けてこない。

とりあえず欠片から手懐けようと触れてみると、水晶はそれだけで言葉を発しなくなった。

どうやらどちらかが触れることにより、小さな水晶と巨大な本体とのリンクが切れるらしい。

「と、ここまでが限界か・・・」  
残り10mの所で影となる場所が消えた。

麓で見る巨大水晶はまるで機械のように所々で光を放ちながら、彼らが出てくるのを待っている。

「とりあえず、俺がレーザーをひきつけるから・・・威はすぐに本体まで走って触ってくれ」

今までの水晶の構造からしてそれが一番正しい方法に思える。

「囿は俺がやるから、理の方が本体に・・・」  
「威、俺の方が足が速い。囿になっても俺なら撃たれない」

いつもの言い聞かせる口調に、威は口を尖らせた。

確かにこんな危険な囷は足の速さや俊敏な動きが重要となる。理は威よりもウエイトも身長も一回り大きいが、俊敏な動きは威以上にできる。

だが胸に蟠った何かが『不安』を警告している。自分がこの決断を決めることで、何かを失う危険性を示している。

「それじゃ、行こうか」

理の声にはつと顔をあげるとすでに彼は物陰から出る準備を整えていた。

もうこうなったら自分が素早く本体までたどり着き、暴走を止めるしか手立てはない。

腹をくくった威は大きく深呼吸をすると理と視線を交わし、彼が飛び出した2秒後、本体に向かって走り始めた。

理はその言葉どおりに、自分に向かってくるレーザーを巧みによけている。

本体にたどり着いた威はこれで暴走を止められると信じてその硬質な表面に手を当てる。

しかし、今までとは違い、声はやまず、違う問いを投げかけてきた。

『アナタ・ハ・ダアレ?』

### 第23話：問掛（後書き）

物語がやっと佳境に入ってきました。

サブタイトルは問掛といかけです。本来なら送り仮名が必要ですが他のタイトルと同じようにするために外しました。

## 第24話：散羽

あなた・は・だあれ？

その質問に威の動きは止まった。

早く止めなくてはならないのに、求められる答えがわからない。

「俺は、麻樹威だ」

とりあえず名乗ってみたが、反応は返ってこない。

先ほどと同じ『アナタ・ハ・ダアレ？』を繰り返すのみだ。

「光の王・・・光王だ」

その答えも違った。威は焦るように記憶の中を探った。

理は威と共に質問を聞いていた。

名前 たぶん、ここにいた『金色の天使』が知っているはずの名前なのだろう。

彼女が自分たちのことをどう呼んでいたのか・・・理は威が標的にならないにずっと水晶メガリスを刺激しつづけながら、『幻影の中の少女』が自分を、そして威のことをなんと呼んでいたのか思い出そうとしていた。

エアルとリデルは離れた場所で二人の様子を見ていた。

かの質問は彼女たちの耳にも届いている。威が自分の名前を、ついで光の王と名乗ったのに暴走は止まらない。

「どうしましょう、エアル様」

リデルは不安げに横にいる彼女に助けを求める。

問い掛けられたエアルもどうすべきか迷いながらその光景を眺めていた。

ふと視線を上げるとメガリスの頂点の方で大きな力が渦巻いているのが見えた。その力は四方の水晶に反射しつつ、強さを増している。

（あれは……）

エアルは自分の羽を出した。それがどれだけ危険なことかは承知していた。

（あの大きさは避けることなど出来ない）

自分が巻き込んだ二人の少年。それを死なせることは出来ない。

あの力は、絶対に自分の近くに存在するものに反応するはず。威を狙うのか、理を狙うのか解からないが止めなくてはいけない。

「エアル様っ！！」

止める、リデルの声を振り切って彼女は大空へとその身体を舞い上がらせた。

「エアル様っ！！」

リデルの叫び声に理は目を見開いた。

視線を上げると巨大水晶メガリスの中から今までにない力が貯まっていることに気づく。

「危ない！逃げろっ！！」

理の叫び声にエアルが上空で静かに笑う。

その姿は自殺したときの母の表情に似ていた。

止めようと天に伸ばした手も虚しく、水晶から放たれた光線は、彼女の身体を無数に貫き、白い羽が当たり一面に飛び散った。

威は後ろの喧騒にも気づかず、記憶を探りつづけた。

ふっ・・・と目の前の水晶に金色の髪をした少女の顔が浮かぶ。

自分の顔か？とも思ったが、違う。これは女の子の顔だ。

『・・・さま』

少女は自分に向かい、何かを呼びかけている。自分と同じ紫色の瞳が悲しそうにゆがめられる。

『お・・・さ・・・ま』

鈴の転がるような声で彼女は、自分をそう呼んでいた。

『イリュウズ  
御兄様』

叫ぶようにその口は動き、記憶の中のものとは思えない声が耳に残る。

「俺は・・・イリュウズ・・・」

『ハイ、確認シマシタ』

水晶の声が機械のように正解だと告げた。

落ちてくる身体を抱きしめながら、理は「どうして、こんなことを」と何度も呟いた。

自分たちに任せたままにしておいてくれればよかった。

もし莫大な力が自分を襲ったところで、自分自身の自己防衛本能が働き、無事切り抜けられることを理は知っていた。

「ごめ・・・なさい・・・体が動いて・・・しまいました」

あたりに散ったはずの白い羽はエアルの身体を離れると風の中に消える。

もしかしたらこの羽はデュファ族の見せる能力の幻影で、本当に背中から生えているものではないのかもしれない。

「それに、あなたたちに伝えていないことが・・・」

「なに・・・」

エアルの身体からは大量の血が流れ出し、大地を濡らす。

言葉を喋るのすら辛い状況だろう。こんな状態で言うのだからそれは重大な事のはずだ。

「水晶メカリスの扉は・・・一人しか・・・通・・・ない」

最初から帰れるのは一人だけだったのだ。

それを告げたらこの旅路をやめてしまうのではないかと思ってエアルは彼らに告げなかった。彼女は謝るように瞼を下げ、理は小さく首を振って見せた。

理の腕に抱かれたまま、エアルは大分散ってしまった翼を閉じる。それと同時にその身体からは翼の痕跡は消え、彼女の手には青緑色をした透明な水晶玉が現れた。

「わた・・・しの・・・贖罪・・・あなた・・・がこち、らに残るのなら、・・・こ・・・ぐらいはひつよ・・・でしょ？」

彼女は最期の力を振り絞りながら水晶を理の胸に押し当てた。『

珠』はそこに固体として存在したのが嘘のように理の身体の中に飲み込まれる。

「つばさ・・・あげる」

最期になっこりと笑って、彼女はその瞳から生の色を失った。

## 第24話：散羽（後書き）

タイトルは散羽<sup>ちるは</sup>・・・そのまんまです。

私はキャラを生むときに、だいたい死ぬ場面から生むのでエアルを生み出したときもこの場面が一番最初に浮かびました。最初思っていたときよりも人数が若干一名多くなっていますが最初の設定そのままにかけたので少しだけ嬉しいです。

## 第25話：嘆声

パズワードがあたったのか、明滅は明確な意思を持って規則的に動き始めた。

『私ハ、コノ水晶ヲ管理スル者・・・』

水晶の声は、先ほどよりもすっかりとした口調で威に話し掛けてきた。

『内部へノ扉ヲ開キマス』

一仕事を終えた威はほうっと胸を撫で下ろすと、喜びの顔で後ろを振り返った。

だが目に入ってきた光景にすべての言葉を失った。

自分と理の間に降る白い羽。それがエアルのものであることは一目瞭然だった。

彼女の背を覆っていたはずの羽は自分の義兄の背中へと移動している。

紅い、紅い血が理の腕を伝い、大地を染めている。美しく波打つ栗色の髪は零れるように理の足元に広がっていた。

「ど・・・して」

何も、起こらないはずだった。誰も傷つかないと信じていた。

なのに、こんな。自分が解除に手間取ったから・・・

『早く・・・私ノ中へ・・・守ル力ガ私ノ言ウコトヲ聞カナイ』

慌てるように喋る水晶からの声がおかしかった。

防衛装置が自分の言うことを聞かない？ならば切り離して壊せばいいのだ。

自分の中の枷がカシャン・・・カシャン・・・と音を立てて外れていく気がする。

「あ・・・ああ」

身体が光に包まれる。様々な色に変化する光が自分たちを攻撃していた水晶のみを叩き壊す。

威は目を見開きながら、自分から放出される光の束に瞠目する。

「リデル・・・エアルの身体を・・・」

防衛システムが殆ど壊れたところでやっと傍まで辿り着けたリデルに理は血塗れたエアルの身体を託す。

彼は強く肯くと、自分の服が汚れるのも構わずにエアルの顔の汚れを拭い始める。

理は暴走を開始した威に近づいた。理が近づくほどに威から発せられる光の力は増す。主の意思を無視した光の力は、先ほどの防衛装置たちと同じく近づく人間へと牙を剥こうとした。

しかし理は自分に纏わりつく威の力を一払いで外すと、慣れない人の死に混乱している義弟の身体を抱きしめた。

「・・・んで・・・なんで・・・」

理の腕の中で、威の身体から発せられる光は徐々に力を無くした。その代わり聞こえてくるのは嗚咽まじりの問い掛け。理は自分の肩口に押し付けられた威の頭をしっかりと抱きしめる。

「威様・・・理様・・・」

顔を綺麗にし終えたのか、エアルの身体を抱えたりデルが自分たちの元に歩いてきた。

威は、理の背中を叩く形で合図を送り、腕を開放してもらった。

リデルの腕の中にいるエアルの身体は無慚なぐらい傷ついているのに、その顔は傷一つなくまるで眠っているように見える。理と威を守れたことに満足したのか、その口元は微笑んでいた。

理はリデルに抱かれたエアルの身体をただ静かに見つめた。

自分を庇って死んだ少女の顔が、自殺を図った母の表情かおと重なる。まるで愛しい者を見るように最後に投げかけられた笑みは彼の心に深く刻み付けられた。

威のように泣く事も、叫ぶ事もできない自分が不思議だった。母が死んだ時にそんな感情など壊死えししてしまったのかも知れない。

『早く、私ノ中へ・・・防衛装置ガ復旧シマス』

焦る水晶の声に周りを確認するといつのまにか水晶が元の形を取

り戻そうとしていた。

「リデル・・・今度こそ離れていてくれるか？もしかしたら最後に崩壊させるかもしれない」

本来守るべきものを失い、狂ってしまったシステムなど最終的には崩壊させなければならぬ。

それはたぶん、自分の役目だと、理は確信していた。

「威、行こう。エアルの開いてくれた道だ」

素直に涙を流している義弟の肩をぽんと叩き、理は水晶内部への入り口を指差す。

威も理の呼びかけに小さく肯くと、最後に一度だけエアルの死に顔を見てから理と共にその内部へと入っていった。

## 第25話：嘆声（後書き）

威がやっとエアルが死んだことに気づきました。遅すぎですが・・・  
五感を幻視に取られていたということで許してやってください。

## 第26話：助力

### 地球世界

洸野は余りの悲しみに目を覚ました。

誰かが泣いている。理が、威がないている。威は大粒の涙を流して、理は涙さえ見せずにただ嘆いている。

窓の外をみるともうすぐ夕暮れが近づく時間に差し掛かるところだった。逢魔が時が近づいてくる。

洸野は慌てて起き上がると準備をしているだろうリュウファの方を見た。彼は窓の所で外を見ながらタイミングを計っているようだった。

「どうしたの？」

急に起き上がった洸野にリュウファは静かに視線を返す。

「何か、起きた・・・心が揺れた」

洸野の呟きに、リュウファは扉の前に行くとその手をドアの板につける。

臉を閉じて、何かを探っているようだ。

「あれ・・・なんだ、これ・・・こんな仕掛け・・・」

リュウファは困惑するように呟きながら強く強く扉の板に掌を押し付ける。

「こんな、まさか・・・」

読み取れた情報にリュウファは困惑した。

こんな時分になるまで読み取れなかった情報の中に洸野には伝えたくない・・・自分だって信じたくない内容を見つけた。

「リュウファ・・・？」

泣きそうな顔でなんとか画策している彼に洸野は心配そうな視線を送る。

「扉が、一人分しか持たないように設計されている」

その上、引き寄せるための扉は目の前のものなのに、異世界から通じる穴は扉以外の場所ところに穴が開く可能性が高くなった。

そのうえ扉が開けないことにはその帰還するための穴の位置も掴めないそんな込み入った仕掛けだ。

とりあえず穴がこの屋敷の敷地内に開くように『道』を調整しなければならぬ。

逢魔が時までには時間がない。

急がなくては、せつかく戻ってきた人間を引き上げることができなくなり、またどこかに攫さらわれてしまう可能性もでてくる。

「・・・一人、だけ？」

冨野は口元を押さえながら、その事実を受け止めていた。

そうなった時に、あの二人が取る行動が彼には手に取るようにはわかった。

特に理が行うだろう行動は・・・そしてそれに協力する人がいれば・・・絶対に、理は帰ってこない。

(約束したのに・・・約束し・・・)

違う、約束は『いつになっても、こっちに帰る』だ。

それは理がこの状態を予測していたのか、それとも単なる語彙だけなのか判別できない。

足が震える。悲しくて力が入らない。

ベッドの上に座っているのだから、きっと時分は醜態をさらしていただろう。

部屋の外が騒がしくなった。なんだろうと視線を向ける。

トントントントントントントン・・・

「冨野くんはここにいますか？」

続けざまのノックと理たちの父親の声・・・。

冨野は自分の足を叱咤しつつ立ち上がると部屋のドアを開けた。

そこには召使いを付き従えた麻樹家の当主の夫、麻樹良弘あまきよしひろが立つ

ていた。

「ありがとう、実さんみのみが帰ってきたら内線みのみで連絡してください」

彼は付き従っていた彼女たちに礼を言うと、魔法陣が浮かび上がっている理の部屋に入り鍵を閉めた。

190cmを越える背の高い彼の視線が『異世界との扉』の前で必死に作業をしているリュウファの姿を捉えた。

「風の、精霊ですか？」

「え……ああ……そうみたいです」

良弘の問いに、冴野が肯く。彼は冴野を連れてリュウファの元まで来ると幼いその顔を確認する。

(恵吏ちゃんに似た子ですね)

良弘は少しだけそう思うと、リュウファが支配している魔方陣の上に両手を置いた。

急に介入してきた強大な別個の力にリュウファは驚いて振り返る。そこには理に少し目元が似ている男性がこちらを見て頷いていた。

「私が、落ちてくる穴の位置をトレースして冴野くんに教えます。

あなたは穴が絶対にこの家の敷地内に繋がるように集中してください」

確かにトレースしながら、すべての次元の穴をこの屋敷の敷地に集中させるのは難しい。

目の前の人の能力を見れば、理には及ばずとも威以上の能力を持っているのは明確だ。ならば頼るのが正解だろう。

「良弘、おじさん……大丈夫ですか？」

良弘が自分の能力を使うのを嫌っているのを知っている冴野はおずおずと尋ねた。

彼は家族に対してのみしか見せない笑顔を冴野に向けると、静かにかけていた眼鏡を外した。途端、彼のオーラが蒼に変わり、瞳と髪が藍色へと変化する。

「こういう時に使うために能力ちからというものはあるんですよ」

どれほど大きな力も使いどころを誤れば単なる凶器でしかない。

また出し惜しんで後から後悔することは二度としたくないのだ。

「冨野くんは、祈りの力を集めてください……」

「祈りの力？」

冨野は親友の父親の言葉に不思議そうな顔をする。

自分の能力は昼間に一回放出されたので知っているが、それ以外に何かできることがあるのだろうか。

「ええ、今から耳の枷を外します……そうすれば、実さん、由宇香、恵吏ちゃん……その他の人の声が聞こえてくるはずですよ。それを集めてこの魔方陣に放出してください」

良弘の手が、冨野の両耳を塞ぎ開放する。

瞬間、様々な声が彼の中に雪崩こんできた。

冨野はその中から悪意を取り除き、聞き覚えのある声を探す。

「誰か、お兄ちゃんたちを……」

これは二人の妹の由宇香の声。

「僕たちに、力を……二人を救えるように」

これは、自分たちの親友の恵吏の声。

「無事で……無事でいてくれ」

これは、二人の母の実の声。

「『絶対に、無事で』」

これは、自分の兄である剣人とその恋人である裕穂の声。

さまざまな祈りの声が彼らの持っている能力と共に冨野の元へと集まってくる。それはどんな悪意よりも強く、邪悪なるものを排除できる力を持っていた。

冨野は自分の中に溢れそうになる能力をそのまま魔法陣に流した。それと同時に陣は最高の光を発し、やがて開くだろう向こうからの扉のために力を発し始めた。

## 第26話：助力（後書き）

おいしい所取りの良弘登場です。同時連載している『青炎の目覚め』の主人公で威の実父、理の義父になります。神に匹敵する並以上の炎を操る人物で、威・洸野・恵吏の能力が暴走しないように枷を掛けたのはこの人です。

洸野が『地球の森の王』ならこの人は『地球の炎の王』に位置します。

## 第27話：決断

キュスリア

開かれた水晶<sup>メガリス</sup>への入り口を入ると、雰囲気が一変した。外にあったような禍々しい黒い瘡<sup>ウケ</sup>はなく、ただただ木漏れ日のような光が当たり一面を満たしている。

「外とは雰囲気が違うなあ」

威も理と同じ意見らしく、繁々と柔らかい光を放つ壁を眺めながら歩いている。

通路は一直線に続き、その先には祭壇のようなものがある部屋があった。

ここも通路と同じく光る石の壁でできており、その中心には何かが嵌め込まれていた。ただろ跡だけが、空虚<sup>むな</sup>しく残っていた。

部屋の隅には3mはありそうな黒い石がおいてあった。

光の部屋の中でそこだけが闇を生み出している。

だが石の有する『闇』は夜の帳のように優しく、暖かい気を出している。その石の表面は鏡のように磨きこまれていて、前に立つ人物の姿をしっかりと映し出していた。

『道ヲ見ツケニ来タノデスカ?』

外にいたときよりもはつきりとその声は二人に問いかけてきた。

あくまでもそれは平静でまるで狂っていないようにも感じる。

「ああ、あなたがたが主なる星<sup>せかい</sup>と呼ぶ地球へ帰る道を見つけるためにきた」

理はそういうと何かが奪われた祭壇に向かって自分の言葉を伝える。その言葉に、水晶の中の光が悲しそうに明滅する。

『ワカリマシタ、貴方ガソウ望ム以上、私ニ止メル術<sup>すべ</sup>ハアリマセン』  
少しの沈黙の後、声は悲しそうにそう告げた。

理は悲しそうに何も無い祭壇を見上げた。

やはりメインのシステム部分は狂っていない・・・自分たちを呼んだ声も、彼女のものでも、そして奪われた少女のものでもないのかもしれない。

だがその答えを出すには、自分たちの持つ情報があまりにも少なすぎた。

『シカシ、私ノ能力ハ既ニ大半ガ失ワレツツアル・・・』

声の主はどこか達観したように静かに言葉を続ける。

『コノ世界ガ何者カニヨツテ狂ワサレタ時カラ、ソシテ『彼女』ガ心亡キ者に奪ワレテシマツタ時カラ・・・能力ノ汚染ガ始マツタ』

心亡き者・・・新しく就任したという『光の最高神官』によつて『黄金の天使』が奪われたことにより『光』と『闇』のバランスで封じられていた『魔』が能力を得てしまい、その一部が残されていた『闇』を喰らつて世界へと流出してしまった。

メガリスを守る水晶たちも、内側から来る魔の汚染に戸惑い、すべての人間を排除しはじめ、本体の『彼女』は残りの『魔』に飲み込まれないように特定の人物のみにしか『入口』を開かないようにした。

『私ニ従ウ能力ハ後ワズカ・・・今ノ私ニ一人ノ人間ヲ運ブ能力シカ残サレテイマセン』

贖罪をするように告げる彼女の口調が、エアルの言葉と重なった。

(水晶の扉は一人しか通れない)

最後に告げられた彼女の予言・・・彼女はやはり巫女だったのだらう。

こういう未来を知り、自分に残るための理由を残してくれた。

理は隣で衝撃を受けている威を見た。信じられない、と見開かれた瞳は状況をうまく判断できないようだ。

「威・・・お前が地球に帰るんだ。エアルが、翼を残したということとは俺がこの世界に残る未来を知っていたんだらう。だから・・・」  
「やだ！絶対にやだっ！！二人一緒に帰るんだっ！理が残るっっていうんなら、俺も残る」

威はむずかる様に「いやだ！」と否定を繰り返す。

彼には理を一人で残していくことなどできるはずもない。義理の兄弟だとしても、5歳のときからずうっと一緒に暮らしてきた『家族』のだ。『他人』だなんて思ったこともない。自分のたった一人の大切な兄をどうして置いていけるはずがない。

「ここで二人一遍に行方不明になって、義父さんや義母さん、由宇香を悲しませるのか？」

理の言葉に威の肩がびくと揺れた。

彼はそんな家族思いの義弟の姿に普段は誰にも見せない最上級の笑みを見せた。自分よりも幾分か低めの位置にある頭を優しく優しくなでながら、諭すように彼にお願いする。

「それに、威が残るより俺が残ったほうがいい。順応能力だって俺の方が優れてるしな」

威はその言葉を非難するようにやつと視線を上げてくれた。

それに向けて、理ももう一度笑顔を作って見せた。だが今度は先ほどのように自然に笑うことはできない。義弟の瞳に浮かんだ涙が、自分との別れを本当に悲しんでいることが見て取れた。

「それに、山下を一人にするのか？」

理が最後に出したのは究極の一言だった。

4人の幼馴染みのうち、恵更はすでに望まぬ海外生活を強いられている。その上で自分たちまで彼の元からいなくなってしまうたら彼はどうなるだろう。

確かに彼と一緒に暮らしている兄もその婚約者も・・・麻樹家の人間だって彼を慰めることに努力は惜しまないだろう。しかし彼が人に言えない孤独に苦しむことは自分たちが一番知っていた。慰めてくれる人に『大丈夫』と笑って応えながら、心の中でずっと泣きつづけることを。

「やっぱり、理が帰ればいい」

冨野の心と一番繋がっているのは理だ。それぞれと先に出会っている威よりも深い友情を彼らは築いている。

それは理の深く深くに負った傷を、直す術を洸野が持っていたからかもしれない。

洸野の内に秘めた孤独を埋める術を、理が知っていたからかもしれない。

逆に威が一番仲がよかったのは恵理だった。彼女は一人で孤独に耐えながら、常に新しい道を切り開いている。二人でいることは確かに意味があるが、一人で生きていける人間の強さを彼女も自分も持っている。

威が出してくる反論をある程度予測していたのか理は、背中に生えた翼を大きく動かして「こんな翼ものをつけて？」と自嘲してみた。

「彼女エアルのようにしまっておけばいいだろ」

「だめだな・・・絶対に何かしらの不備が出てくるはずだ・・・お前が帰るべきだ」

理の言葉を聴きたくないでも言うように威は思いっきり頭を振った。

## 第27話：決断（後書き）

威が「一人しか帰れない」という事実をやっと知りました。理視点  
のできるだけ話を進めているのでわかりにくいかもしれませんが、  
威の方は理の背中の中の羽を見たときに漠然とした予感として理との別  
離を予測しています。

## 第28話：別離

自分が嫌だと拗ねることに困った表情を浮かべる理に、威はさらに困惑する。

泣き喚いてもおかしくないぐらいなのに、その嘆くための声が自分の喉の奥に詰まってしまつてなかなか出てこない。

「条件を出そう」

理は彼の心を宥めるために提案を申し出た。

「威は、一旦地球世界に帰る。そして山下や月路つきじ、それから威たちの能力の封印をしている良弘義父さんと一緒に俺を地球世界に戻す手段を考えてくれ」

もう一人頼れる人物がいるが彼のことは洗野リュウファがしてくれるだろう。

「俺もできる限り此方の情報を集めて、二度とこんなことが起きないようにした上で変える方法も探す。」

もちろん、自力で変える方法を見つけたら、即刻帰ると約束する・  
・わかつたか？」

理が最後に念を押すと、威は渋々ながら頷いた。

「わかつた」

肯定の言葉に、理は震えている義弟の体を抱きしめてやる。

「俺が帰れるまで、みんなを守つてやつてくれ」

『俺が帰るまで、家族を守つてくれ、理』

かつて理の実父である勝が、仕事に行く前にまだ幼い自分に残した言葉。今、自分が発した言葉と妙にシンクロしてしまい、『親子なんだな』と変に実感させられた。

理の言葉に威は何度も頷く。

その目からは止めどもない涙が溢れ、彼の秀麗な顔は悲しく歪んでいた。

威はしばらくそのまま泣いていたが、やがて決心を固めると理の腕から抜け出しゆっくりと立ち上がった。

「水晶……地球への扉に案内してくれ」

水晶は光る壁の一点から一条の光を黒い鏡の様な石へと注いだ。

『扉八元来コノ世界ヲ創ツタ者ガ残シテクダサツタ……ソノ鏡ニ闇マタハ光ノ力ノ干涉ガアレバ扉八開キマス』

その言葉のとおりによりに少し強い光を浴びただけでその石は逆に表面の光沢を失い、まるでそれを飲み込んでるように闇の力を強くさせた。

威はゆっくりとした歩調で扉の石へと近づく。

一步、また一步と進むごとに、先ほど片鱗が目覚めた能力が淡く紫色の光を放ちはじめ、それに呼応するように扉の闇が深くなっていく。威が扉の前に立つ頃にはすでにもとの光沢もなく、底知れぬ深き闇を内包する状態にまで変化していた。

「理……約束だから……絶対に俺は……俺たちは理を連れ戻す方法を見つける」

威はぎゅうつと握り締めた拳を震わせながら静かに宣言した。

振り向かないのは、威が自分の泣き顔を晒したくないのからかもしれない。

「ああ、待つてる……俺も戻る術を探しながら、ずっと待っている」

『待つている間はおその確率はゼロにもマイナスにもなりませんわ』  
エアルの言葉どおりに、少しは信頼して待ってみよう。誰よりも頼りになる家族や親友たちを。

威が鏡に手を伸ばした。触れる、と思われた手はとぷりと闇の中へと漬かる。吸い込むような力がその腕から伝わってくる。

「地球世界のことは頼んだ」

「ああ、まかせろ」

威は強い口調で答えると最後に一回だけ振り向いた。

その顔は涙に濡れているものの、何かを覚悟したようにしっかりとした表情だった。

そして威は身体ごと闇の中へと飛び込んでいった。

後に残ったのは静寂。

理は目を閉じて威が今飛び込んだばかりの扉に手をついた。自分までも飲み込もうとする鏡の手を無視しながら、『地球世界』で扉を開けようとしているリュウファとそれを手伝っているだろう冼野にメッセージを送る。

『こちらの扉は、通した・・・そちらの扉を開いて、くれ』

## 地球世界

扉を開けるタイミングを見ていたリュウファはその声に閉じていた目を見開く。

同様に声を聞いたのか、冼野も良弘もこちらを見ている。

リュウファは静かに能力を貯めるとゆっくりと扉を開いた。

途端に吹き込んだ次元と次元の間に吹く風。

それから邪悪なものを排除しつつリュウファは扉の向こうに手を差し出し、威のシグナルを探し始めた。

## 第28話：別離（後書き）

理と威のお別れです。

この部分は威の側の視点で書いたことがあったのですが理側の視線の方がより詳しくなります。すべてを理解している者としていない者との差かもしれません。

## 第29話：闇王

威が飛び込んだ先には暗い闇しかなかった。

地球世界とは違う・・・だが何か覚えのある空気。

暗闇に目を凝らしてみても、闇が深すぎて何も見えない。自分が発しているはずの光すら闇に侵食されていつてるのがわかる。

(ここは・・・?)

威が思うのと同時に威の足元だけがぼんやりと明るくなった。

その明かりをつかつて回りの様子を見てみる。

ヨーロッパの神殿のようなつくりの部屋だ。部屋の奥の壁には巨大な玉座・・・そこには誰かが座っているようだった。

「ここを、通るものが現れるとはな」

静かな、落ち着きが有り耳障りのいい静かな声が自分に話し掛けてくる。

「この闇の中でも光そ放つとは・・・光の者？」

その声は答えなど求めていないようだ。巨大な足が玉座の所で動いているのが見える。

「闇から光を生むもの・・・射朧か？」  
イリュース

自分のもう一つの記憶の中にある名前を呼ぶ者に彼は鋭い視線を送る。

「あんたこそ、誰だ？」

「私の名前は闇流、アリユウ闇を統べき者だ」

男は威の問いに迷いもなく答える。それがまるで普通のことのように。

「どうして、この道を通るのだ？」

闇の中でその顔は見えないが、彼は本当に不思議そうに急に現れた威を観察している。

もつと見たくて目を凝らすと、威の身体が更に光った。今度は見えなかった顎のラインまでが見えるようになった。

「道を探しているんだ・・・地球に続く道を」

威の答えに男は手を顎に当て、考える仕草を作る。

こういう仕草を威はよく見ていた。イリユーズと呼ばれていたときも、今も・・・。

「・・・何かの干渉を受けたというわけか」

考えていた彼の口が忌々しそうに低く呟く。

干渉が何なのかは分からないが、それは威にとってあまり喜ばしいことではないのだろう。

それに、ここはどうやら地球世界ちとめているせかいではないようだ。

「ここはどこだ？」

威が問うと、彼は静かに答える。

「・・・ここは時空の狭間、此処は過去であり、未来でもある。そしてお前が求める時間へも通じる分岐点ターミナルのような場所」

周りを見ると、威の生み出した光により無数の扉が照らし出されていた。その何れもが硬く扉を閉ざしている。

「私は過去の亡霊。思っただけがこの場所に残り、最後の要たる扉を彼らに奪われないようにしている」

よくよく見てみると、玉座に腰掛ける彼の身体は微妙に透けていた。思っただけになってもずっと守りつづけている彼が、少し悲しかった。

彼は自分の存在理由を告げるとすうっと手を上げ、ある扉を指差した。

「その扉がお前が望む扉だ。その向こうからお前を呼んでいる声がある。どれも私も知っている声に似ている。この声がしている限り、扉は『地球世界』ちとめているせかいに向けて開かれる。

私もわずかながら力を貸そう」

カチャリ・・・

ドアの方から音がした。それはその扉の鍵を彼が開けた音だった。

途端に、自分を呼ぶ様々な声が扉から零れだす。

お礼を言おうと振り返ると、先ほどまで見えていた足が色を失い、透明になりかけていた。

「この扉を私が開く時、私は役目を終える……」

その言葉どおりに扉を示していた指も薄く消えかけていた。

「助けてくれて、ありがとう……最後にあなたの顔を見たい」

威は感謝の意をこめて深く礼をした後、闇に隠されて見えない彼の顔を再度見上げた。

威の申し出に彼の口元が静かに笑みを作る。その表情は記憶の一番近い場所にある『彼』の顔と重なった。

「扉が開くとき、光が私の顔を照らすだろう……その時、見えるはずだ」

威はその言葉に「わかった」と肯くと示された扉へと向かう。

扉は両開きの立派な扉で、ノブにまできちんと意匠が凝らされていた。彼はそのノブを握り、静かに扉を開く。

差し込む光の束、威は彼の顔を見るために振り向いた。

(え……?)

見上げた顔は静かに笑っていた。

黒い長い髪、漆黒の瞳、すつきりと通った鼻梁、眉目秀麗という言葉が当てはまる美しい容姿……少し大人びているが、その顔は先ほど分かれた義兄きぎょうと酷似していた。

光が、彼の笑顔を消していく。

扉は威の身体を吸い込むと、真っ白い空間へと彼を引き摺り落とした。

## 第29話：闇王（後書き）

座っていたのは理の前世で『地球の闇の王』の姿です。  
能力と願っただけが地球世界へのゲートを守る空間を作り、守って  
ました。同じ顔、同じ声、年齢は闇王というぐらいですから並以上  
の年齢・・・大体死亡したときで1000歳は越えていると思われ  
ます。服装は神様っぽいのを想像してください。

### 第30話：帰還

#### 地球世界

扉の向こうに手を伸ばしたりリュウファは風の声を聞いた。

時空を渡る風が、遠い昔に奪われてしまった自分をよく知る人物の声を伝えてきた。

（なんで・・・）

伝わってきたのは、時空の狭間から・・・それは迷い子となっていた『<sup>たける</sup>彼』を送り出し、悠久まで持つといわれた能力で守っていた扉を開放するという声。

彼の記憶の中で、すべてを引き連れて死に、そして転生を果たした闇王の声。

「今のも、理の声？」

冨野の耳にも届いたのか、彼は不思議そうに隣にいる良弘に問い掛ける。

しかし同じく声を聞き取った彼は少し首を傾げている。

「少し、違う気がします・・・」

声は全く一緒だったが、雰囲気が違う。もつと重厚感のある、何百年も何千年もそれ以上に生きていた人間の声に聞こえた。

「それよりも、冨野君、準備を・・・後1分後、庭の白木蓮の下に、穴が開きます」

冨野はその言葉に、肯き、魔法陣から手を離れた。

開け放した窓から外に出るとベランダから外の庭へと繋がっている階段を駆け下りた。白木蓮は、理の好きな花で花の盛りにはよく二人で花見をした。ベランダから人工池へと抜ける道の途中にあるそこへ彼は一直線に向かう。

冨野がその場に着いたのは丁度1分を経過した時だった。

闇の中に浮かぶ白い花、その花の下に空間の歪が不気味に存在し

ていた。洸野は力任せにその空間へと手を突っ込むと手に当たったものを引っ張り出した。

ぐぼり・・・

無気味な音ともに見慣れた紫がかった黒髪が洸野の前に現れた。

間違いない。本物の威だ。意識を失いぐったりとしているが、間違うはずがない。

「威っ！威っ！」

洸野は叫びながら、その身体を穴の中からもっと引きずり出そうと力を入れる。しかし穴から伸びてきた無数の腕が彼を邪魔しようとして・・・洸野まで引き込もうと彼の腕や身体に巻きついてきた。

「放せっ！返せっ！」

引きずり込もうとする手は黒さを増し、引き裂かれた空間を更に広げて洸野へと襲い掛かる。

それをなんとか避けながらも、洸野は威の身体を引きずり出すことに成功した。

獲物を取られた手は、更に伸びて、容赦なく二人に巻きついてくる。洸野は意識のない威の身体を庇うように抱きしめながら、引きずり込もうとする力に必死に耐えた。

「洸野くん、そのまま威を捕まえててくださいね」

後を追いかけてきた良弘が静かにそう告げた。

洸野は良弘の言葉に、威を抱きしめる力を強くする。

良弘は紅い夕闇の中、辺りを青く染め上げる炎を身体から発し、空間の歪への的確にそれをぶつけた。

一瞬にして燃え上がる無数の手。手。手。炎は洸野の身体にも当たるが、彼には怪我一つ負わせない。ただ高温の熱だけがそこに存在していると感じるだけだ。

良弘は更に手を生やそうとしている歪の中まで炎で焼くと、開いている穴を力任せに閉じた。その隙間からはみ出してこようとする

手は悉く、蒼い炎に焼かれ、辺りには臭気が満ちた。

「うわ、力任せの技・・・」

最後に追いついてきたリュウファが良弘の行動を見て、小さく咳いた。

どうやら彼から見てもとんでもない行動らしい。

「そのまま、閉じておいてね。その空間を閉じるから」

少年の言葉に良弘は無言で肯く。

リュウファは青緑色の光を出しながら、風を呼ぶと良弘の手によって強制的に閉じられているその穴を封鎖していく。

最後に出てきた手を、良弘は容赦のない炎で焼き落とすと、そこには元の静寂が戻ってきた。

「大丈夫、ですか？」

良弘に問われて、冨野は呆然としながら「はい」と答えた。

彼はその答えに良弘は「そうですか」と静かに微笑むと、冨野の腕の中で意識を失っている息子の身体を軽々と抱き上げた。

「もうすぐ実さんが屋敷につきます。」

今の騒ぎで由宇香も目を覚ましたようですね。威が目を覚ましたら、リビングでこれからのことを話し合いますよ。」

冨野はその申し出に小さく肯くと、良弘の後について歩き始めた。

### 第30話：帰還（後書き）

第29話の字数が多くなったので切りましたが、二つの話を足して帰還となります。

リュウファが時空の狭間から聞こえる閻王の声を懐かしいと言ったのは彼が理の前世からの知り合いだったことの証明です。

物語は後、最終部分を残すだけとなってきました。

### 第31話：崩壊

キユスリア

威が助けられた状況を読み取りながら、理はほうつと息を吐いた。これで取りあえずは一安心だ。

長い間、『通路』みちとなった黒い石に手をつけていた理の身体には多くの闇色の触手が纏わりついていた。

理は静かに息を吐くと、自らの意思で『自分の中にある枷』を次々に外していく。

途端、その身体からは闇の能力が流出し、絡み付いていた手を悉く食らっていった。

逃げ惑い、石の中に戻ろうとする手を全て喰らった彼は、その絶大なる闇の力を黒い石の中へと一気に流し込む。

純粹で強大な闇の力に石はがたがたと大きく震えはじめ、全体に亀裂が入り始めた。

『何ヲシテイルノデスカ？』メカリス

まだ正気を保ったままの水晶メカリスの意思は突然の彼の行動に驚きの声をあげた。

「さつき、触っていて気づいた。この場所が汚染されたのはこれのせいだ」

次元の狭間とをつなぐ通路、番人である金色の少女を奪われ、襲いくる外世界からの悪意を押さえることが出来なくなった扉。

この装置が、新たな守護者を求めて威と自分をこの世界へと呼び寄せた。

もともとこの石を作った闇王と同じ力を持つ自分と、自分の周りで生み出された闇を悉く光へと変換する能力を持った威、そのどちらかを番人として閉じ込めるために。

この黒い石をそのままにしておいたらまた同じ事が繰り返される。

理を求めてキュスリア全体に異変を起こさせるか、地球世界から威を……それとも自分たちと同等以上の能力を持つ友人たちを浚ってくる可能性も棄てきれない。

『ナラバ、私モ壊シテ頂ケマスカ』

内包するものすべてを奪われ、水晶を守るためだけに守護壁は暴走を繰り返す。

たとえ今は正常に判断を下すことが出来ても、いずれ自分という存在が狂っていくだろう事を水晶は自覚していた。

「ああ、わかっている」

理はそういうと押し込む闇の力を強くした。

地球世界で義父に焼かれた白い手が、元の邪悪な色へと戻り、理の力に反発する。

しかし触手たちの望むよりも大きすぎる闇の能力は、汚染された扉の許容量などすぐに上回り、またたくまに亀裂を深くさせていく。

本体からはがれる破片が、光の床に落ちては粉碎してゆく。

理はふと、自分の手の先に当たる物体に気づいた。

それは魔に汚染された黒い石の中でも自分が持つのと同じ純粹な闇の力を放っていた。

この存在があったからこそ、扉はたった一人とはいえ地球世界に返すという本来の役目を担えたのだらう。

理は少し奥にあるそれを掴むと、力任せに引き抜いた。

途端に、黒い岩は砂のように力を失い、ざああつと崩れ落ちた。

理の手に握られていたのは大ぶりの剣だった。持ち手もシンプルで豪華な作りのものとは違うが、黒光りする刀身の美しさはそれが名剣であることを示していた。

『ソレハ、アナタノ剣……ソレガ扉ヲ固定シ、コノ世界ヲ介して主ナル星ヲ守ツテイタ』

「そうか……」

前の生の自分が何を考えていたのかわからないが、確かに自分の物だと実感できる剣がここにある以上何かの目的で自分がこの水晶をひいては、この世界をも作ったのだろう。

そして、自分の剣を嫁して作った守りが穢れ、崩れた以上、自分は地球を守る術を新たに探さなくてはならない。

理は剣の柄をしつかりと握るとゆつくりと視線を上げた。

「最期に、君の名前を聞いていいか？」

自分の名前を尋ねてくれたことを喜ぶように、壁の一面が暖かい光に満ちた。

「私ハ、イル・・・メガリス・イル。光天使ト同じ名前ヲ持ツヲ与エラレタ者」

破壊を望む彼女は理が狙いやすいように自分の急所ともいえるべき場所のシールドを外した。

彼は翼を広げ、その場所まで舞い上がると自分の身体の中から尽きることなく生まれくる闇の力を噴出してその場所を叩き切った。

黒い刀身が、水晶を引き裂く。

闇の力が、水晶を砕く。

大きな亀裂が全体へと広がり、崩壊が始まった。

「アリガトウ・・・」

水晶は今までの中で一番穏やかな口調で、彼に礼を言った。

そして彼女の意識はそこで途切れる。

崩壊する水晶の中、彼は自らを守るために回りの空間に結界を張り巡らせた。上から降ってくる凶器のような水晶の塊は、その結界に触れるたびに砂塵となって消えていく。

それを見ていた理は、大きく息を吸い込むと、結界ごと水晶の部屋の天井へと体当たりをした。

彼が思ったとおりに、天井は結界に触れた瞬間、砂塵となって崩れ落ち、空の青さが彼の目に飛び込んできた。

彼は大空へと翼を翻すと、彼の足下でどんどんと形を失っていく  
水晶の姿を瞼の裏に焼き付けた。

### 第31話：崩壊（後書き）

異世界キユスリアと時空の狭間をつなぐ扉を固定していたのは闇王の剣です。  
彼の前世の剣ですから、理に馴染むのはあたりまえかもしれません。

### 第32話：終章〜地球〜

#### 地球世界

威が目を覚ますと、そこは見知った自分の部屋だった。

先ほどまで自分がいた世界は夢だったのか・・・それは夢で、理はこの世界にいて・・・そんな風に頭を巡らせる。

「目が、覚めましたか？」

「父さん・・・」

心配そうに覗き込んでくる視線に、自分が体験したことはすべて現実であると思いきらされる。

見ると父の横では冨野が静かに自分を見ていた。母も珍しく早く仕事を終わらせたようで、父とは反対サイドで自分の顔を覗き込んでいた。

「勝さんに連絡を入れた。理は行方不明という形で、高校には休校届を提出してある」

すべて電話一本で済ませた。

理の父親の勝は声も出ないような状態だったが、息子が選んだ選択肢をそれなりに理解し、彼の帰還を信じていた。

学校も副理事長である実自身みのみから理事長である風原和久かざはらかずひさに連絡をいれてある。

報道機関には、麻樹の全勢力をもって圧力を掛け、彼が行方不明になった事実は家族のみが知る形に替えた。

とりあえず、警察にも連絡は入れてあるが、彼らには見つけれないだろう。

なぜなら、理はこの世界とは違う世界にいるのだから。

威はぎゅうつと布団を握り締めた。自分の不甲斐なさをかみ締めるように。

「お帰りなさい、というべきですかね・・・」

良弘は自分を攻めている自分の息子の頭を抱きしめると、静かに静かにその背中を撫でてやる。実はベッドに腰掛けると夫の胸で悲しみに肩を震わせている息子の髪を梳いてやった。

洸野はその様子を暫く眺めてから、静かに部屋を出た。

今は3人だけにしておいたほうがいいだろう、そう思った。

「洸野お兄ちゃん」

部屋を出て暫く外を眺めていると、背後から声を掛けられた。振り返ると由宇香が心配そうにこちらを見ていた。

「威・・・お兄ちゃんだけが、帰ってきたって・・・」

彼女に伝えたのは若い女中のうちの誰かだろう。年配の女中たちは実の指示があるまでは絶対に彼女に告げたりはしないはずだ。

「威は部屋にいるよ」

洸野は何とか笑いながら、彼女に威の部屋を示す。

だが彼女は彼の足にしがみ付いて、無言のまま首を横に振った。

誰よりも悲しいはずの彼が、笑っていることが辛かった。この優しい人を泣かせてあげられるほどの腕を持っていない自分が悔しかった。

「由宇香ちゃん・・・？」

声をかけると少女はもつと強く自分の足に抱きつく、どうしたものと困っていると威の部屋の扉が開いて実と良弘が揃って出てきた。

「由宇香、放してあげなさい」

実の言葉に由宇香は渋々巻きつけていた腕を外した。心配そうに見上げてくる視線を受け流しながら、洸野は威の部屋の扉に視線をやった。

「威は、もう一度寝ました。まだ話せる状態ではないみたいです」

丁寧な口調で、洸野の欲しい言葉をくれる良弘に彼は「そうですか」と小さく呟いた。良弘はそんな彼の頭をぽんぽんと優しく撫でてあげる。

「リュウファさんに聞きましたが、理はここへ帰ってくると約束し

たのでしょうか？威も同じことを言っていました。

では私たちができることは無くしたことを嘆くのではなく、取り戻す術を見つけることです」

そのための能力は誰もが持っている。ただ扱いきれないほど強力な能力で、それを開放することがまだできないだけだ。

「できるだけのこととはしてみましよう、君達も・・・そして私達も」すべての可能性を投げ出すことは愚か者のすることだ。

時はまだまだある。理が一人で異世界キユスリアでがんばっているというのなら、地球世界側地球の人間がただ呆然と待っているはいけないはずだ。「そうですね、とりあえず、連れ戻して、頭を殴って・・・笑ってやります」

半泣きのような笑顔で、洸野は良弘の言葉に同意した。

たぶん、今、眠りについて威も同じように思っているはずだ。

自己犠牲の大好きな親友を殴るために、自分がなすべきことを見つげようと洸野は静かに心に決めた。

### 第32話：終章〜地球〜（後書き）

やっとこさ終章になりました。とりあえず事件後の地球側の話です。威はまだシヨックが抜けきっていません。リュウファはどっやら帰って、アメリカにいる恵吏に報告しに言ったようです。

### 第33話：終章／キュスリア

キュスリア

森の木々よりもずうっと大きな水晶がすべて崩れ去った後、理はゆっくりと地面に降りた。

瓦解した水晶の破片がきらきらと光を反射している。森は静寂を取り戻し、森全体を覆っていた暗いオーラも消えている。

「ご無事でしたか……」

破片が飛んでこないような所までエアルの亡骸を抱えて逃げたりデルは瓦礫の前に佇む理の姿を見つけ安堵の息を吐いた。

「エアルの羽があつたから……自分の結界で天井を突き破って出ることができた」

本当は翼などなくても浮かぶことは出来たのかもしれないが、中途半端に能力の封印がはがれている状態では足場を固定することなど難しかっただろう。

「こんなときでも、役職名なんですね」

理の言葉にリデルが悲しそうに呟いた。理はその態度の意味がわからず、不思議そうに彼を見た。

「役職？……」

「彼女の正式名は風の最高神官<sup>エア</sup>セルシア・ウィンディアです」

本当に知らされていなかったらしい理にリデルは真実を述べた。

「そうか、セルシアさんって呼ぶのが正しかったんだな」

役職でしか呼ばせなかったのは彼女の意地だったのか。今となっては解からないけど、何かしてやられた気分になる。

「彼女の<sup>セルシア</sup>亡骸は……？」

理の問いにリデルは彼女の亡骸を置いた場所まで案内をする。

低い丈の草の上に横たえられた死体の周りに輝石で結界が張られている。リデルが彼女の死体を獣から遠ざけるために施したのだら

う。

「きちんと埋葬をしないと、な」

理は彼女の亡骸の横に跪くと僅かに着いていた血痕を拭ってやる。

「それには及びません」

二人しか居ないはずの空間に年老いた男の声が響いた。

見上げると羽を持った人間が次々と舞い降りてきた。

「お初にお目にかかります、闇王殿。

私は最高神官エアルであるセリシア様の補佐をしていたヴェーネント。

後ろに控えておる者たちは風系神殿の神官です」

豊かな白髪と長い髭を持つ老人はゆっくりと礼をした。

「麻樹理です。はじめまして」

理も彼にお辞儀をすると彼の表情を観察した。どうやら敵意はないようだ。

「我ら有翼人種デュファで埋葬とは罪人に対してすること……しっかりと人生を全うしたデュファは荼毘に臥され、風に帰するのが筋……ご遺体は我らが引き取り、相応に乗った形で葬りたいのです」

挨拶もそこそこに切り出してきた老人に、理は『そういう者なのか？』と隣にいるリデルに目線で問い掛けた。

彼が真顔で肯いているところを見ると、どうやら目の前の老人が言うことは事実のようだ。

「それでは、あなた方にお返しします。相応しい礼式を持って天に返してあげてください」

現役エアルの最高神官だった彼女の遺体を異世界の人間である自分がどうこうしてはいけなさと感じた理は、草の上に横たえられた彼女の遺体を静かに抱き上げヴェーネントに従っていた若い神官に託した。「葬儀に、立ち会ってくださいませんか」

安らかな死に顔を確認した彼らはもう一度理に向き直るとそう願った。い出た。

理も「俺でよければ」と了解する。

了承を得られた彼らは静かに謝礼を述べると、翼を広げた。白い

翼が次々に大空へと舞い上がる。

「リデル、君も、参加するだろう?」

「たぶん、無理です。馬の脚では間に合いませんから」

理の問いに翼を持たないリデルは諦め顔で首を振った。

理は少しだけ考えると、自分よりも15cmは小さいリデルの身体を肩に担ぎ上げ、翼を広げた。ふわりとした浮遊感と共にリデルの身体と共に宙へと浮く。

「うわわわわわわわ」

「暴れると落ちるぞ」

理の言葉に慌てて動くのをやめたその身体をしっかりと抱きかかえて、理は先へ行く神官たちの後を追っていった。

### 第33話：終章（キユスリア（後書き））

逆に理とリデルの事件後です。

エアルが役職名なのを理はもちろん威も知りません。セリシアさんは案外、いろんな所で『罨』を張っていたようです。主人公側なのに地球側よりも字数が少ないのは主要人物が少ないためと、理があまり話さないせいです。

## 最終話：旅立

### 地球世界

威は闇の中、再び目を覚ました。誰もいない自室。見知った家具のあちこちに思い出が刻まれている。

自分は一人で帰ってきてしまった。理を助けるための手段を求めるためといいながらも、その手立てすら思い浮かばない自分がこの世界に帰る意味はあったのだろうか。第一、あちらの世界では理のような闇の者に対して嫌悪感を抱いている者もいた。

最初にいた村の住人たちのように彼に謂れのない悪意を向ける可能性だつてある。

威は苦しそうに自分の胸を押さえる。思考が巡り続ける所<sup>せい</sup>為で再び眠ることもできない。

彼はふと思いついて自分の部屋を出た。そしてそのまま割合に近い位置にある理の自室へ向かう。

「あ……」

理の部屋の前の廊下に人影を見つけた。

並よりも高い身長、がっしりとした立派な体格……それに見合う秀麗な顔立ちの人物。

「起きたのですか？」

廊下の前の窓から裏庭の森を眺めていた父親の問いに威はこくと肯いた。

「理の部屋では洗野くんが寝ています。今日は遠慮してあげてください」

時空を精神だけで飛び越える力を持ちながらも、親友を救えなかったことで彼は自分と同じように傷ついている。

置いてきた自分もそうだが、取り戻そうとしていたこちら側の人達だって傷ついているのだ。

「少し、話してもいい？」

「どうぞ？」

いつも落ち着いている父の姿は、自分をどんな時でも安心させてくれた。

今、自分にかけられている封印が取れかかっているから解かるが、父から届く能力が外界から守るように自分を包み込んでくれるからだろう。

「どうして俺の能力の封印をしたの？」

威の質問に良弘は視線を息子に落とすと静かに笑った。

「理から聞きましたか？」

「うん」

短い答えに彼は「そうですか」と答え、窓の枠に座るような形で威に向き直った。

「そうですね、単純にまずいと思ったからですよ」

威の身体の表面にありありと見える良弘自身がかけた封印を内側から破った痕跡。

もともと威の持つ力は封印の効き難い能力の質だと感じていたが、自分が仕掛けた封印をこんな力任せな技で引きちぎれる程とは思わなかった。

良弘は小さく息を吐くと、封印の経緯について話し始めた。

「威は近くにいる闇の者・光の者に反応してその逆の能力を発揮する能力を持っています。」

封印されていても私よりも強大な『闇の能力』を持つ理をこの家に引き取り、一週間経つ頃にはあなたの光の力は5歳児の肉体が押さえられる許容量を超えるまでに達し、髪の毛も金色に、瞳は明るい董色へと変化しました」

当時、慌てたのは良弘や実ではなく回りの使用人たちだった。

突然、5歳の子供の紙の色や瞳の色が変わったのだから当たり前

の事だろう。

逆に良弘はどこかで『ああ、やっぱり』と納得していた。

理を引き取ってからの屋敷の内での様々な力の流動が激しくなっていたのを知っていたからだ。

「このまま放っておいたら非常に危ないと思い、大体18歳までを目処に能力の封印を行ったのです。そのときはこんな事が起こるなんて夢にも思ってもませんでしたから……」

封印したことを後悔はしない。

そうしなければ違う意味で自分たちは別離や崩壊を迎えていた。

「同時に、冨野くんにも色々な封印を施しました。彼は持っている能力の特殊さゆえに『人でないもの』に常に狙われていましたから、その予防の意味で行いました。」

……恵更ちゃんも同様に、あなた方が連れてきてその翌日には能力を封じました」

冨野に封印をしたのは良弘の友人でもあった彼の母親からの依頼があった。

恵更は幼いままでも能力を有し、暴走することを恐れて彼女自ら望んだ。

そして……

「理には……？」

残る一人の名前を口にした息子に彼は静かに首を横に振る。

「理の能力の封印は私ではありませんよ」

良弘はそれだけ告げると、その答えを告げずに窓枠から腰をあげた。

無言のまま「誰なの？」と聞いてくる威に笑みで返して立ち去ってしまう。こういうところは伯父・甥の間柄なのに変に理に似ていた。

威は暫くその場で考えていたがすぐに考えるのをやめた。

とにかく明日から、またがんばらなければならぬ。

まず手始めに良弘に自分の能力の封印を解いてもらおう。そのた

めには眠って体調をベストのコンディションまで回復しておかなくてはいけない。

取り戻すための何かを得るために、彼は拳を固めると自室へと戻っていった。

## キュスリア

エアルの葬儀は滞りなく行われた。

彼女の遺体を焼いた炎が風に煽られ、大量の火の粉を風に舞い上がらせる。その旅に彼女の魂は有翼人種<sup>デュファ</sup>の父祖の地、風の中へと帰っているように見える。

大方の儀式を終え、彼らは喪服のまま葬儀の後片付けを開始した。後は遺体が燃えきるまで交代しながら炎を絶やさないようにするだけだ。

「これから、どうなさいますか？」

儀式を取り仕切っていたヴェーネントは恭しく聞いてくる。

「世界樹の元へ、向かおうかと思えます」

リデルを抱えて飛んでいる最中に得た情報ではそこには自分の剣と同じように『光の剣』があるのだそうだ。

水晶の剣が扉を固定しておくためのものだったのだから、その剣も何かをするためにそこに置いてあるはずだ。

「そうですね・・・では、これをお持ちください」

差し出されたのは数通の書類と金で作られた手の込んだ装飾具だった。

「これは？」

「我ら風系神殿の身分証明証です。何かと必要になるでしょう」

彼の申し出に、理は感謝の意を示すとそれを体にはめていく。

翼の映えた状態でそうしていると確かに風の一族に見えないこと

もない。

「ありがとうございます」

すべてを付け終えたところで再度、礼を言うと彼は静かに否定をする。

最高神官がその命を科して守ろうとしたものを補佐である神官が守るのは当たり前だった。

旅支度を終えた理は最後にもう一度だけ、エアルの葬儀を見やるとその護摩壇にも礼をする。

そしてゆっくりと大空へと翼を広げた。

途端に彼を舞い上げる風が理を上空へと導く。

小さくなっていく風系神殿。

彼はそこにもう一度礼をすると自分の目的の場所へと向かって翼をはためかせたのだった。

## 最終話：旅立（後書き）

とりあえず、一端、至空の時は終わります。

地球世界とキユスリア側、行動がばらばらになるために一緒の話として進めるのが難しい所為です。

地球側は威を主体として『夢見の家』という短めの話が何個も入る連載へ。それが終われば理の主体の『この場所から』という短編集が始まります。それが終わったら、やっと理の帰還を含めた至空の時2が始まります。

ここまで読んでいただき、ありがとうございました。まだまだ物語りは序盤を終えたところですので、それぞれの話をまた読んでくださると嬉しいです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9152b/>

---

至空の時

2010年10月8日14時29分発行